方城時雨の奇妙でイカれた学園生活

水面出

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
方城時雨の奇妙でイカれた学園生活

【Ｎコード】
Ｎ９０１２Ｘ

【作者名】
水面出

【あらすじ】
中３のある日方城時雨の元に届いたとある学園の入学許可通知。
それは波乱に満ちた学園生活の始まりの合図だった・・・

プロローグ　入学許可通知　来る！（前書き）

はい！始めさせていただきました！初の小説です！まだまだ未熟ですが、暇があったらどうぞ読んでください！

プロローグ　入学許可通知　来る！

「入学許可通知？俺に？」
「そうだよ～」
姉さんからの突然の知らせに？マークな俺。

「え？なんか話が見えて来ないんだけど・・・」
実際訳が分からなかったんだ。そりゃ確かに俺は受験生（高校のな）で、今は１０月だ。

はっきり言うと進路はまだ決まってない。さすがに少し焦っている。と言っても俺の学力なら大体どこでも入れるけどな（えっへん）。

で、話を戻すけど、何で今入学許可通知なんかが来るんだ？

一般入試は２月、推薦入試は１月だ。それにどんなに早く進路が決まっても１２月くらいになる筈だ。それなのにまだ希望すら決めてない奴に、しかもこの時期に入学許可通知が来るなんて摩訶不思議極まりないことだ。ぶっちゃけあり得ないだろ。

「姉さん、順を追って説明してくれ。」
「何？姉さんのスリーサイズが聞きたいの？」
誰がそんなこと言った！？

「も～、時雨ったら・・・でも・・・時雨にだったら教えてあげてもいいよ？」
「興味ない。というか聞いてない」

「むー・・・」
何ほっぺたをふくらましてんだよ・・・

「だからな姉さん、何でこんな通知があるのかって聞いてんだよ」
「ポストに入ってた」
当たり前の答えをありがとう。

「時雨～、『姉さん』じゃなくて～昔みたいに『小夜お姉ちゃん』って呼んでほしいな～」
「断る。そして俺の質問に答えろ」
少しイライラしてきたわ。

「冷たいな～でもそこが好き～♪」
頭痛くなってきた・・・

「クールな時雨と・・・あんなことやこんなことを・・・」
あ、もう駄目だこのバカ。
「もういい、とりあえずよこせ」
「あ・・・」
俺は姉さん（バカ）から通知をとった。

「ええと・・・
【方城時雨殿
貴殿が我が光天寺学園に入学することを許可します。
入学式は４月６日朝９時からです。
学園の場所は地図を同封していますのでそれを参考にしてください。
尚、我が学園は全寮制なので当日は必要な荷物を持って登校してください。

それでは会えるのを楽しみにしています。
光天寺学園理事長
湖倉　薊　　】

・・・何だこりゃ・・・

「全・・・寮・・・制・・・・？」

あ、なんか姉さんの顔が険しくなってる・・・

「そんな・・・時雨と毎日会えないなんて・・・・」
バカ発言3秒前

2

1

「姉さん死んじゃうよ～～～～～！」

いっそのこと一回死んでみたらどうだ？
少しはバカが治るかも知んないぞ？

「や～だ～！時雨と離ればなれになるなんて～！姉さんおしまいだよ～！この世の終わりだよ～！」

大げさ過ぎだ・・・

それにしても・・・・
光天寺学園・・・ね・・・

聞いたことない学校だが・・・

他に特に行きたいところがあるわけでもないし・・・

なんか面白いことありそうな感じだし・・・

よし・・・！

行ってみっか！！

プロローグ　入学許可通知　来る！（後書き）

はい！プロローグ終了です。次回は人物紹介をさせていただきます。

人物紹介　Part1（前書き）

どうも。今回は人物紹介です。といっても二人だけですが・・・

人物紹介　Part1

人物紹介

名前：方城時雨
性別：男
身長：１７１．５？
血液型：Ａ型
誕生日：９月５日
本作の主人公

髪は黒で短い。

両親は１０年前に亡くなっており、現在は姉と一緒に暮らしている。

基本的な性格は面倒くさがり屋で問題に巻き込まれることが嫌い。

だが自分の大切なものを侮辱されたり傷つけられたりすると感情を押さえられなくなる。

自己中ではないが他人の都合もあまり考えない。

ルックスは一言で言ってしまえば超イケメン。

さらに頭脳は天才的に良いし運動神経も並みのレベルではない。
そのため小・中共に異性にモテていた。
ただ本人は恋愛感情には非常に疎く、好意を寄せられても全く気付かない程鈍い。

いわゆる唐変木。

好きなものは魚介類、漫画、ゲーム、面白いこと。

肉類、野菜類も普通に食べるが魚介類はそれらの１０倍は多く食べる程好きである。

漫画は約１０００冊
ゲームは約１００本持っている。

面白いことが好きなのは単純に面白いからである。

嫌いなものは面倒くさいこと、芳香剤の匂い、ミョウガ。

面倒くさいことは前述の通り。

芳香剤は人工的に加工された匂いが嫌いらしい。

ミョウガはなんか好きになれないらしい。

姉の小夜に関してはバカでブラコンどうしようもない姉だと思っているが、両親が亡くなってからいつも一緒に居てくれたのは小夜なのでそこは感謝している。

小夜がピンチの時は助けたり、料理を作ってやったり、世話を焼いたり、色々してやってる。

なんだかんだ言ってもやっぱり小夜は大切な存在だと思っている（本人はそういう事は話したがらないが）

趣味は料理。

その腕前はプロをはるかに越えている。

レパートリーは５００種類以上あるらしい。

光天寺学園から入学許可通知が来てそこに入学することを決めた。

これから何が起こっていくのやら・・・

名前：方城小夜
性別：女
身長：１６１．１？
血液型：Ａ型
誕生日：７月１３日
時雨の姉。

現在は大学１年生。

超がつくブラコン。

夜中にこっそり時雨のベッドに入り込んできたり

ところ構わず時雨に抱きついてきたり

一緒にお風呂に入ろうとしてきたり

さらには友達に

「彼氏いるの？」と聞かれた時に、

「時雨～！」と答えたり

最早ブラコンのレベルを越えているかもしれない。

だがそれは時雨を誰よりも大切にしている（少々やり過ぎだが）からこそやっているのだ（というかそう信じたい）。

頭は時雨程じゃないが良い方である。

ちなみに現在通っている大学は国立六桜大学。

選んだ理由は講義の

短さ。

バイトをするためだ。生活費は資産家の叔父から月２０～３０万程送られてくるが、それだけだとちょっと足りない為である。

運動は苦手である。

容姿は普通に美人である。

好きなものはもちろん時雨。
それと時雨の好きなものも好き。
嫌いなものは時雨に敵対する奴と気にくわない奴。
前者はまだ良いとして、後者は完全に私情。

体のラインは良い感じである。
出てるところはちゃんと出てるし、しまっているところはきちんとしまっている。

時雨が全寮制の学校に入る事になったとき駄々をこねた。

今回はこの二人で終了です。

人物紹介　Part1（後書き）

はい、今回は終わりです。
〈次回予告〉
時間の流れは速く・・・入学の日になった・・・
そこで待ち受けていたのは・・・！

次回
入学式とクラス

ep1　入学とクラス（前書き）

第一話です。ちょっと文章おかしいとこあるかもしれませんが、ご勘弁を。私の文章力ではこれがげんかいです・・・

ep1　入学とクラス

「ここ・・・か・・・」

俺は通知に入っていた地図を頼りに来た。

「結構でかいんだな・・・」

現在日時
４月６日９時

場所は光天寺学園（だっけ？）正門前。

時の流れは速いもんだな・・・

あの通知がきてから
俺は残りの中学生活をエンジョイした。

そしてそのまま普通に卒業と・・・

結構名残惜しかったな・・・

そんでもって、春休みの間に色々準備したな。

制服買ったり・・・
ってか光天寺学園（だっけ？）って制服の種類半端ねえな・・・軽く１５種類以上あったぞ・・・
しかも改造自由だし・・・
ま、俺は面倒くさいから改造なんざしないけどな。
それに校則も見たけど・・・
――染髪、アクセサリーゲーム、漫画、バイトあり。
まあここまでは良いよな？だけど・・・
――不純異性交遊あり
おいおい・・・
不純って言っちまってるよ・・・
――いじめあり

あっちゃ駄目だろ！？

——援助交際あり

駄目だ駄目だ駄目だーーーーー！！

——以上の行為は問題なしとする

問題ありすぎだろ！？
どこに援助交際（エンコー）ＯＫする高校があるんだよ！？

——尚、この校則にはツッコミ所満載だとおもわれますが、そこはツッコまないでください

ツッコミたくなるっての！
てかこんなこと書くんならツッコミ所をなくせっての！

・・・っと、脱線してきたな。話を戻そう。

ここに入学する事になった時、姉さんが超駄々をこねたが、何とかおさめた。

ったく・・・本当にバカな姉だ・・・

さて、この光天寺学園（であってるよな）は全寮制だ。
俺はしっかり必要なものを持ってきている。
衣類に洗面用具、携帯にＰＳＰ、音楽プレイヤー、パソコンのＵＳＢメモリ、その他諸々。

これで退屈になることはないな、多分。

ガヤガヤ・・・

「着いたねー光天寺学園」
「よーし！カッコいい彼氏つくるぞー！」

おお？何か色々やってる内に他の
新入生もちらほら来てるみたいだな。

んじゃ、俺も行くか。

「ちょっとちょっと！あの人超カッコよくない！？」
「本当！すごいイケメン！」
「ああいう人と付き合ってみたいな～！」

・・・何かやたらと視線を感じるんだけど・・・
「ああ！あのお方を私のモノにしたい！」
今危険な発言がきこえたぞ・・・！？
「シャラッホーーーーーい！！！」
「ゴニョゴニョゴニョゴニョ・・・」

・・・よくよく見たら・・・変な奴らが多いな・・・
俺人の事言えねえけどお・・・！？
「きゃっ・・・」
誰かがぶつかって来た・・・あ、しりもちついちまってる。
しゃーねえ。
「悪い、大丈夫か？」
一応手を差しのべてみる。
「いえ・・・すいませ・・・」

何だ?何か動きが止まったような・・・

・・・ん?

何か見覚えがあるようなないような・・・

そんな風に思ってたら放送がなった。

《連絡します。新入生の皆さんは自分のクラスを確認の後、体育館ホールへ行ってください》

「あ、行かなきゃ・・・」

あ、走って行っちまったよ。

何か見たことある顔だと思うんだがな・・・

思い出せねえ。

ま、いいか。
俺もちゃっちゃと体育館ホールってとこに行かなきゃな。

ＳＩＤＥ？？？

どうしよう・・・

まさか一緒の高校だなんて・・・

私の事、覚えてるかなぁ・・・

５年もあってないしなぁ・・・

でも・・・すごくカッコよくなってたな・・・

・・・

は！？
何を考えてたの私！？

・・・でも、もし覚えててくれてたら・・・

勇気出して・・・話しかけてみようかな・・・

ＳＩＤＥ　時雨

ああ・・・やっぱ入学式だの卒業式だの形式的なものは疲れる・・・

〈次に、理事長からお話をいただきます〉

・・・そういえば・・・理事長から直接来たんだよな。・・・あ、

当たり前の事だったな。

とりあえずどんな人かは気になるな。

段の上にあがったのは・・・見た目１０歳くらいの女の子だった。

「理事長の湖倉　薊なのじゃ！」

・・・・・・へ？

「入学おめでとうなのじゃ！」

子供・・・だよな・・・

何で・・・？

「こんな子供が理事長で皆びっくりしてると思うのじゃ」

うん、当然だろ。

「ちなみに歳は１０歳なのじゃ！」

うん、見た目のまんま。

やっぱこの学園、ツッコミ所満載だな。

「皆楽しい学園生活を送るのじゃ！」

それは大分前途多難だな。

「これで終わるのじゃ！早くしないと見たいアニメが始まっちゃうのじゃ！」

おいおい・・・子供でも仮にも理事長だろうが・・・

んな適当でいいのかよ・・・？

〈ありがとうございました〉

あ・・・いいんだ・・・

その後、入学式は滞りなく終了した。

何だったんだあの理事長は・・・

あ、そういえば俺まだ自分のクラス見てねえや。

俺の名前は・・・

え～と・・・2組でもないし3組でもない・・・って事は、

あった

【方城時雨1年1組】

1組か。

何か俺小学校の時も中学の時もずっと1組だった気がするんだけど・・・

1という数字に好かれてんのか？

まあいいや

とにかく、教室に行くとしますか。

俺は教室がある方へ歩き始めた

ep1　入学とクラス（後書き）

〈次回予告〉
前途多難な俺の高校生活
そんな中　誰かが話しかけてきた

次回　再会と担任

あんまし変わってないもんだな～

ep2　再会と担任（前書き）

第2話です。今回はちょっと短いです。

ep2　再会と担任

1年1組・・・ここか・・・

俺は1年1組の教室に来た。

おお、結構広いな。

机の数が32個ってことは、生徒人数も同じだな。

エアコンもあるし、薄型テレビもあるぞ・・・！？

ってか机よく見たらパソコン備え付けのシステムデスクじゃねえか！？

なんかお菓子も大量にあるし・・・

設備いいな・・・！

それで、俺の席は・・・ボードに書いてあるな。

え～と、あったあった。あそこか。

俺は右から三番目の一番前に座った。

・・・真ん中じゃねえか・・・

すごい目立つんだけど・・・

「あの人カッコいい～！」
「このクラスで良かった～！」
また視線が集まってるような・・・
何でだ？
（→鈍い）

ＳＩＤＥ　？？？
うう・・・どうしよう・・・
（少女は迷っていた）
話しかけようかな・・・
でも・・・
うん・・・！
勇気出して・・・！
「ね、ねぇ・・・」

私は時雨に話しかけた。

ＳＩＤＥ　時雨

お？話しかけられた・・・って、朝会った奴じゃねえか。

・・・・・・ん！？

やっぱり・・・見たことある・・・

「あの・・・」

この声も聞き覚えがある・・・

「私の事・・・覚えてる・・・？」

・・・右目の下の泣き黒子・・・

「出雲・・・か・・・？」

「・・・！」

うお！？
何か顔がすげえ明るくなったぞ・・・？

ＳＩＤＥ　出雲

覚えててくれた・・・！
私の事、覚えててくれた・・・！
すごい嬉しい・・・！

ＳＩＤＥ　時雨

「その反応、やっぱり出雲なんだよな・・・・？」
「うん！」
わー・・・すっげえ嬉しそうだ・・・
でもまさか、出雲と会うとは・・・
５年ぶりか・・・？

「よく覚えてたね！」
「そりゃお前、そんな簡単に幼馴染みのことを忘れる訳ねえだろ？」
普通の事だろ？

「うん、うん！そうだね！」
何でこんなに嬉しそうなんだ？

「何あの子！？」
「抜け駆け！？」
いやいや・・・ちがうだろう・・・

「で、お前はこの学園を受験したのか？」
「うん！頑張って勉強したんだ！何回も死にそうになったけど・・・」
そういえば出雲は大の勉強嫌いだったな。

「時雨は頭良いからそこんところは楽勝だったよね？」
「いや、俺は受験してねえ」
事実だ。

「じゃあ何でここにいるの・・・！？」
最もな質問だな。
「いきなり入学許可通知が来た」
「え・・・？」
そして最もな反応だ。
5年前と変わらず分かりやすいなこいつは。

「・・・」
そんな「信じられない」みたいな顔されても困るんだが・・・

「時雨・・・」
なんか真剣な顔になったぞ・・・
「私気づいたよ・・・」「何をだ？」
「世界って平等じゃないね！」
うん・・・まあ、そうかもな・・・

そんな時にチャイムがなった。
「あ！もう席につかないと・・・」
動くの早っ！

HR

さあ、担任はどんな人だ？
俺がそんな事を思っていると教室のドアが開いた。
「皆さん席についてますか？」
意外と普通の人だな。見た目も「優しそうな先生」って感じだな。
「今日から1年間皆さんの担任を務めさせていただきます。空巻菜奈です。」
ボードに名前が表示された。

「空巻　菜奈」・・・で、「からまき　なな」ね・・・・。
「1年間よろしくお願いします」
おお、お辞儀の仕方がものすごく深々としている・・・

ま、普通な先生で良かっ・・・
「あと、皆さんに一つお伝えしておきます。私の授業でなにか問題を起こしたら容赦なく血祭りにするので・・・」
・・・！？

「覚悟しておいてください」（笑顔で）
今の一言で教室が静まりかえったぞ・・・！？

やっぱり普通じゃねえ！

「天崎さん。言ったそばからボケっとしないでください。血祭りにしますよ？」
「す、すいません！」

出雲が注意されたか。なにボケっとしてたんだ・・・

そういえば出雲の苗字って「天崎」って言うんだっけな。軽く忘れてた。

「今日は特に連絡事項はありません。ＨＲを終わります」

「時雨～！」

出雲が泣きついてきた。こいつは昔から俺になにかと引っ付いてくる。

何でだ？

（→鈍い　本日2度目ｗｗｗ）

「あの先生怖いよ～・・・」

気持ちはわかる。だが俺に何をしろと？

「うう～・・・」

涙目になってる・・・

「出雲」

「・・・何・・・？

」

「いい加減俺に抱き着くのはやめろ」

そう。出雲はさっきから俺に抱き着いている。

「何で・・・？」

「逆に何で俺に抱き着く？」

「・・・」

「何で黙るんだ？」

「うう～・・・」

なんか唸ってる・・・

「唐変木・・・」

唐変木・・・

何でだ？

（→鈍過ぎ　本日3度め）

ep2　再会と担任（後書き）

〈次回予告〉
休み時間に放送で呼び出された。
一体なんの用だ？

次回　特例とお昼

ep3　特例とお昼（前書き）

更新遅くなってすいません！第３話です！

ep3　特例とお昼

「それでは今回の授業はこれでおしまいです」

午前の授業終了。そんな難しくなかったな。高校の内容ってこんなもんか？

さて、出雲のほうを見てみるか。

「・・・・・・」

・・・燃え尽きてる・・・

頭から煙が吹いているように見えるのは俺の気のせいか？

なんか憐れだから声かけてやるか。

俺は出雲の席の方に行き

「おい出雲。大丈夫か？」

「・・・・・・」

へんじがない　ただのしかばねのようだ

少しふざけてみた。

てかこいつ本当に大丈夫か？

「おい？出雲？おーい！」
「・・・ぐすっ・・・・」
おお、動いた。

「大丈夫かお前？」
「全然大丈夫じゃない・・・・」

だろうな～・・・

「何であんなにむずかしいの！？鬼なの！？いじめなの！？」

いやいや・・・
「私に死ねって言ってるの！？」

「お前な・・・」
行き過ぎだろ・・・

つうかそんなに難しかったか？
「今『そんなに難しかったか？』って思ったでしょ！？」

何・・・！？

こいつ・・・5年の間に読心術を身に付けたのか・・・！？

「言っとくけど読心術なんか身につけてないからね！？」
バカな・・・！？

また心を読んだのか・・・！？

「読んでないよ。なんとなくそう思っただけ」

それにしちゃあ当たり過ぎだろ・・・

「まあ・・・いいか・・・」

「とにかくさ！難し過ぎるよ！これじゃあ私卒業するまえに死んじゃうよ～！」

「ならもっと勉強すりゃあいいだろう」

「ぐ・・・」

おお、見事に黙った

「そ、それができたら苦労しないよ～！」

ああ・・・そう・・・

「よし！もういいや！忘れちゃおう！」

それでいいのか？

「いいの！」

また心を・・・

「そんな事より、時雨、お昼たべようよ～！」

あ、そういえば昼休みか今。

「学食があるから二人で一緒にたべよ？」
「ああ、別にいいぞ」
「やった～♪」

何でこんなに嬉しそうなんだ？

ＳＩＤＥ　出雲

やった～♪
時雨と一緒にご飯だ～♪

久しぶりだな～
二人で食べるのは。

『時雨～はい、あ～ん』
『あ～ん』

な～んてやっちゃったりして～！
キャ～～～！！

〈連絡します。１年１組　方城　時雨君、理事長室へ来てください〉

・・・え？

「なんの用件だ？まあいいか」

え・・・？

「悪い出雲。俺ちょっと行ってくるわ」

「あ・・・」

そう言って時雨は行っちゃった・・・

ご飯・・・一緒に・・・食べられると思ったのに・・・

『あ～ん』できると思ったのに・・・

理事長のバカ・・・

ＳＩＤＥ　時雨

理事長って最上階にあるのか・・・

ちなみに光天寺学園は６階建てだ。

さて、普通に立派そうな感じだが・・・

中はどうなってるのか・・・

俺は理事長室のドアをノックした。

〈入っていいのじゃー！〉

元気いいな・・・

「失礼しまっす」

う～わ・・・なんだこの空間・・・

お菓子のゴミがそこらじゅうに散乱してるし・・・

ＣＤにＤＶＤ、それに漫画もあちこちに散らばってるよ・・・

汚な過ぎだろ・・・

呼び出すんなら少しくらい片付けとけよ・・・

「よーくきたのじゃ！」
ソファーに座ってるけど・・・なんかソファーがものすごくでかく見えるんだけど・・・

「呼び出したのはちょっと話があるからなのじゃ」
立つとさらに小さく見えるな・・・
１４０ないなこの高さじゃ・・・

「話ってなんすか？」
「簡単なことなのじゃ！」
内容は？

「ホント誰でも分かるのじゃ！」
で、内容は？
「ホントにホントに分かりやすいのじゃ！」
言えよ早く！

「方城、お前はほかのせいととは違うのは気付いてるのじゃ？」
他の生徒と・・・

「入学のことすか」
「そうなのじゃ！」
うわ、すっげえビシッと指差された。
「他のせいとはちゃんとにゅうがくしけんを受けたのに・・・お前だけ違ったのじゃ！」
「そうっすねいきなり入学許可通知きたし・・・」
それは確かに俺も気になるな。
「何故そうなのか、聞きたいのじゃ？」
「ああ、まあ・・・」
「いいのじゃ！教えてやるのじゃ！」
さっきからこの人上から目線過ぎじゃね・・・？
「お前は特例なのじゃ！」
特例・・・？
「どうして特例なんすか？」
「くじで決まったのじゃ！」

・・・・・・は？

「どういうことっすか、それ・・・？」
「どうもこうも、ただそれだけなのじゃ！敢えて言うならウチの気まぐれなのじゃ！」

・・・・・・

「アホかあああああああ！！！」
「はにゃあ！？」
俺の声はきっと学園中に響いただろう。
「そんな大声で叫ばないでほしいのじゃ～・・・」
「これが叫ばずにいられるかあ！！」
「あう・・・」

「あんたバカか！？バカなのか！？くじで決めたってテキトウ過ぎだろ！！真面目に理事長やってんのか！？てか何であんたみたいな子供が理事長なんだよ！？普通あり得ないだろうが！？」
「そ・・・それもまた特例で・・・」
特例・・・？

「特例って言えばなんでも許されると思ってんのか！？ああ！？」
「あうう・・・」

「てかこの部屋汚な過ぎんだよ！！他人の事呼ぶんならもっと片付けとけ！！タコ！！」
「た・・・たこ・・・」

「なんか背小せえし！！変なしゃべり方だし！！上から目線だし！！ふざけんなあ！！このバカ理事長があ！！！」

言ってやったぜ・・・
言いたい事全部・・・
どうだこら！

「う・・・」
ん？なんか涙目に・・・

「うえええええええええええん！！」
あ・・・
泣いちった・・・

「そんなに言わなくてもぉ・・・そんなに言わなくてもぉ・・・！
ふぇぇぇえええええん・・・！」

あー・・・どうしたらいいんだこりゃ・・・

「理事長・・・？」
「うえええええええええん！」
く・・・！
泣き止みそうにねえ・・・！

こうなったら・・・！

「理事長！」
「うえええええええええん！！」
「オレンジジュースあげるから泣き止んでください！」

「・・・（ピタ）」
泣き止んだー！！
本当に聞くとは思わなかったー！！

「ホ・・・ホント・・・？」

・・・ごはっ・・・

シグレはたおれた

なんだこの涙目&上目遣いのコンボは・・・・!?

俺はロリコンだったのか・・・・!?

いや・・・これはロリコンじゃなくても・・・・

こうかはばつぐんだ!!

「まあ・・・オレンジジュースくれるなら・・・許してやるのじゃ・・・!」

お、元に戻った。

まあとにかく泣き止んでくれて良かった・・・

「で、話はそれだけなんすか?」

「そ、そうなのじゃ!!」

「じゃ、俺戻るんで」
「お、オレンジジュースは・・・？」

・・・そんな不安そうな目で見るなあああ・・・！
それに涙目も禁止だあ！

「ちゃんと後でもってきますよ」
「・・・！」

そこで満面の笑みを浮かべるなあああああああ！！！

ＳＩＤＥ　出雲

私は一人で焼き魚定食を食べていた

寂しいよ～・・・
一人のご飯は・・・

「よお、おそくなったな」
「はひゃあああああああ！？」
「おい、いきなりでかい声出すなよ・・・」

え！？いつの間に時雨が！？
「焼き魚定食か。うまそうだな」
は！
これは・・・チャンス！？

「た、食べる・・・！？」
「へ？」

よ～し・・・！

「は・・・はい！あ～ん・・・！」
私は焼き魚をひとつまみ時雨の口元にもっていった。

「な・・・おいおい・・・はずかしくねえか・・・？」
「いいから！」
「じゃあ・・・あむ・・・」

やったーーーーーーーーー！！！

『あ～ん』成功ーーーーーー！

は・・・！
し・・・しかもこれって・・・
か・・・かかかかか・・・間接キス・・・！？

あ・・・はわ・・・はわわわわ・・・！

「はにゃあ・・・」
「な・・・!?おい!大丈夫かよ!?おい!」

ＳＩＤＥ　時雨

出雲がいきなり気絶した。

何でだ・・・？

ep3　特例とお昼（後書き）

〈次回予告〉

部屋割りが決まったらしいな　　俺の部屋は一体どこになるのか・・・

・

それにあのバカ姉と出雲が・・・

次回　部屋割りとメール

全く・・・いい加減仲良くなれっての・・・

ｅｐ４　部屋割りとメール（前書き）

ちょっと文章おかしいところがあるかもしれませんが・・・とりあえず、第４話です。

あと・・・すいません・・・後書きの重要な部分変えました。

ｅｐ４　部屋割りとメール

「そんじゃお願いします」
「は～い」

俺は気絶した出雲を保健室に連れていった。
どうやってだって？

抱き抱えていったに決まってんだろ。

背負うとなんかいろいろ背中に当たりそうだからな・・・

出雲も一回目を覚ましたんだけどさ、なんかあうあう言ってまたすぐ気絶しちまったんだよな。

一体何でなんだ・・・？

その後午後の授業も滞りなく終了した。

で、終わったはいいけど・・・この学園は全寮制。
そのまま自宅に帰るなんて事はない。
皆それぞれの部屋に行くんだが・・・ここでひとつ問題がある。

俺の部屋は一体どこなんでしょう？

生徒の部屋割りは貼り出されるんだけど、どこを探しても俺の名前が見つからないんだ、これが。

どういう事？

俺には部屋はないってか？

くじで入学が決まった俺には部屋はないってか！？

「あ、方城君」

名前を不意に呼ばれた俺はその方向に顔を向けた。

「方城君に伝えたい事があったんです」

空巻先生・・・だっけ？

「方城君、先生の名前はきちんと覚えましょうね。血祭りにしますよ？」

怖っ！

っていうか心を読んだのか！？

「別に読んでませんよ」

「じゃあエスパーっすか！？」

「エスパーでもありません。そんなことはどうでもいいんです。私はあなたに伝えたい事があるって言ってますよね？」

「あーはい。なんっすか？」

「態度が良くありませんね。肋骨折ってそれを肺に刺しますよ？」

怖いなホントこの人・・・

「また失礼な事を考えてましたね。〔ピーーーーーー〕しますよ？」

「すいませんでしたあ！！ご用件はなんでございましょう！？」

今のは駄目だあーーーーー！！

怖いとかそういうレベルじゃない！！！

公に出せる言葉じゃなかったーーー！！

「では用件を言います。えーと・・・ですね。方城君、部屋割りの貼り紙に名前がないのは気付きましたか？」

「はい。何でっすか？」

「単に理事長が忘れてたそうです」

・・・・・・

「ちょっとあの理事長泣かしに行っていいっすか？」

「ダメですよ。仮にも理事長なんですから」

『仮に』って言っちまったよ今・・・

「先生、何であの子供が理事長なんすか？」

「特例だからです」

また来た特例・・・

勘違いしてねえか・・・？

特例は何でも許される言葉じゃないぞ・・・？

「ただ特例な訳ではありません。ああ見えて理事長は学力は高いんです」

全然そんな風に見えねえ・・・

「どんな風に高いんすか？」

「ＩＱ２００だそうです」

嘘！！？

あれが！？

「私も正直信じられませんが、本人はそう言ってました」

嘘臭え・・・

「話が脱線しました。本題に戻ります」

そうだった・・・

「え～と・・・で・・・俺の部屋はどうなるんすか・・・？」

「安心してください。ちゃんと手配しています」

「そうっすか」

「相部屋ですが」

えー・・・一人が良かった・・・

「文句があるんですか・・・？」

「いえ！ないです！」

今睨んだ・・・！人を睨み殺すかのように・・・・！

「それで、方城君の部屋は、８０８号室です」

「８０８っすね」

そして空巻先生は俺に鍵を渡した。

「なくさないでくださいね？入れなくなっちゃいますから」

「はい」

「まあそれはそれで面白いんですけどね」

「はい・・・！？」

なんか今、また怖い言葉が・・・

「それでは私はまだ仕事があるので」

そう言うと空巻き先生は職員室の方へ歩いていった。

さて・・・俺も自分の部屋に向かうとしますか。

ＳＩＤＥ　出雲

「はっ・・・・！」

・・・あれ？ここどこ？

「起きました～？」

ベッドのカーテンが開いて・・・

校医の岸田先生・・・？

って言うことは・・・ここ保健室・・・？

「食事中急に気絶したって、方城君が連れて来てくれたんですよ～」

時雨が・・・えへへへ・・・

「天崎さ～ん、顔がニヤついてますよ～？」

「はにゃ！？」

顔に出てた・・・！？

「天崎さん、もしかして・・・方城君のこと好き？」

「・・・！」

おそらくその時の私の顔は茹で蛸のように真っ赤だったと思う・・・

「顔が赤いですね～。これは図星ですね～」

「あうあうあう～・・・」

バレた・・・あんまり人に知られたくないのにぃ・・・

「大丈夫ですよ～！私は応援しますから～」

「はうあ～・・・」

おまけにこんなことまで言われるなんて～！

顔から火が出そうだよ～！

「それだけ赤くなればもう大丈夫ですね～。自分の部屋に戻っていいですよ～」
「は・・・はい・・・」
私はベッドから降りて保健室を出た。

あ・・・そういえば私、まだ部屋割りの貼り紙見てないや。

私は貼り紙があるところへ行き

え～と、あ！あったあった！

８０８号室か～！

ＳＩＤＥ　時雨
「おお・・・！！」

俺は部屋に入ってまずこの一言が口から出た。
いや、おおげさかも知れないけどマジすげえんだって！

まず広いんだよ。２０畳以上は軽くある。
そこにフカフカそうな大きなベッドが二つある。
最新型のブルーレイが搭載された薄型テレビに、パソコン二台は置けそうなパソコンスペース。
内装も結構凝ってるし、こりゃあそこら辺のホテルのツインより豪華だ・・・！
洗面所も広くて綺麗だ。トイレも落ち着いた感じになってるし、シャワールームもいい感じだ・・・！
寮で生活ってあんましいいイメージなかったけど、全然問題なかったな・・・！

とりあえず・・・
ボフッと音を立てて俺はベッドに寝転んだ。
「あ～～・・・」
我ながら気の抜けた声だ・・・
すげえフカフカしてるぞこのベッド・・・
このまま寝そうだ・・・

そういえば・・・相部屋なんだっけ俺・・・

誰となるんだか・・・

まあ誰でもいいか・・・

そんなことを思っていると『ガチャリ』とドアの開く音がした。

「わ～・・・ここか～」

・・・・・・

「広いな～・・・って・・・時雨・・・？」

嘘だろ・・・

まさか・・・出雲が相部屋相手なんて・・・

「何でここに時雨がいるの？ここ私の部屋のはずなのに・・・」

「お前の部屋でもあるが、俺の部屋でもあるんだよ・・・」

「・・・つまり・・・どういうこと・・・？」

理解力が無いバカ・・・

「つまり、俺らは相部屋だってことだよ・・・！」
「あ～なるほど・・・・・って・・・・えええええええ！！？」
叫びてえのはこっちだよ・・・
「えっ！？えっ！？相部屋！？私達が！？」
「何回も言わせんな・・・」

SIDE　出雲

ええ！？
時雨と相部屋！？
こんな・・・こんな・・・二人しかいない空間で・・・寝食を共にするってこと・・・！？
あ・・・でも・・・逆にこれは時雨と付き合えるチャンス・・・！？
なら・・・！

ＳＩＤＥ　時雨

「いいんじゃない！？相部屋！！」

いきなり顔が明るくなった・・・

「お前今何考えてた・・・？」

「何も考えてないよ！？」

絶対嘘だ・・・

ったく・・・やっぱり前言撤回だ・・・果てしなく前途多難な寮生活だ・・・

「あれ？時雨、携帯鳴ってるよ？」

「ん？」

あ、本当だ・・・

俺は自分のバッグから携帯を取り出した

メールか・・・

誰からかは想像できるな・・・

俺は送られてきたメールを見た。

【時雨～！
学園はどんな感じ？楽しくなりそう？
お姉ちゃんは時雨がいないから今日からご飯は一人だよ～（＜＿＞）
とってもとっても寂しいです・・・
でもでも！毎日こうしてメールするから！
あとあと！できれば電話もしてくれたらお姉ちゃん幸せで～す！
ということでこのメールを見たらすぐ電話してね～！　　】

・・・バカ姉が・・・
「誰から～？」
「姉さんだ」
「・・・へえ・・・・」
ああ・・・なんか出雲の顔が怖くなってきた・・・
と、そんな時に俺の携帯が再びなった。
今度は電話だ・・・
誰からかは・・・もう、分かりきってる・・・

俺は仕方なく出た。

「もしもし・・・」

《時雨～！お姉ちゃんだよ～！》

「・・・」

ああ・・・出雲がどんどん怖くなっていく・・・

「何の用だよ・・・」

《ちょっとー！その言い方は冷たいなー！お姉ちゃんは寂しかったんだよー！》

声でけえ・・・

《あ～そうそう！誰か友達できた～？》

「いや・・・昔の知り合いに会った・・・」

あんまし言いたかねえけど・・・

《誰誰～？》

「出雲だ・・・」

《・・・》

電話越しでも恐ろしい気が伝わってくる・・・

《時雨・・・お姉ちゃんつまんない冗談は良くないと思うな～・・・》

「冗談じゃねえよ・・・」

《・・・・・・泥棒猫がああああ！！高校でも私から時雨を奪おうっ

ての！？》

プツン

あ・・・出雲の何かがキレた・・・

出雲は俺から携帯をぶんどった。

「誰が泥棒猫だ！このブラコンがあ！！」

《なに！？その声は泥棒猫・・・！？何でお前が時雨の携帯から・・・！》

「ふん！私は時雨と相部屋だからだよ！」

《なぁぁぁにぃぃぃ！？泥棒猫が時雨と相部屋ぁぁぁ！？ふざけんなあああ！！！》

「ざまあ見ろ！このブラコンが！」

《がああああ！！！泥棒猫なんかに時雨を渡すものかあああああ

あ！！！》
「こっちだってブラコンなんかに負けないんだからあああああ！！」

相変わらず仲悪いなこの二人は・・・
《時雨は私のものだあああああ！！》
「なに言ってんのブラコンが！時雨は私のものなの！！！」

・・・

「二人とも！！」
「ああ！？」
《なに！？》

俺は両方に聞こえるくらいの声で言った

「あんましやかましくすると・・・」
「・・・」
《・・・》

「お前らの恥ずかしいエピソードを校内放送でながすぞ？」

「《すいませんでしたあああああ！！！！》」

おお、見事なユニゾン。

俺は出雲から携帯を取り返した。

「姉さん、もう切るぞ」

《あ、ちょっと待っ――――》

俺は電話を切った。

「ったく・・・・」

「うう・・・・」

あ～・・・・なんかすげえ疲れた・・・・

「・・・あ、そうだ！時雨、晩ごはん食べに行こうよ！」

「あ？・・・・まあ別にいいけど・・・・」

「やった♪」

ちょうど腹減ってたし・・・・

俺は出雲と一緒に食堂へ向かった。

ep4　部屋割りとメール（後書き）

〈次回予告〉
食堂で飯食ってると知らない奴が話しかけてきた。ずいぶんと不機嫌なようだけど・・・

次回　夕食と令嬢

非常に面倒臭い奴に目をつけられちまった・・・

ep5　夕食と令嬢（前書き）

タイトルが予定していたものと違ってしまいました。すいません！

とにかく、第5話です！

あと・・・度々すいません・・・後書き変えました。

ep5　夕食と令嬢

食堂到着と・・・

昼はあんまし見なかったけど・・・ここもすげえ豪華だよな・・・

席は１００以上あるし・・・メニュー数も和・洋・中全部揃ってる。

「時雨、あそこの席空いてるよ！」

「おう」

俺と出雲は左奥の空いている席に座った。

「とりあえず席確保と・・・」

「時雨！ほら、早く並ぼ！」

「ぐわっ・・・！」

首つかみやがった・・・！

「やめろ・・・！首を、つか、むな・・・！」

「え？あ、ごめん」

「げほっ・・・ったく・・・」

死ぬかと思った・・・

「はいはい！何にする？」

1分ほど並んで注文のカウンターまできた。

なるほど・・・最初のカウンターで注文をして、次のカウンターでそれを受けとる。

効率のいいシステムだな。

それにしても・・・カウンターで注文とってる人、まだ俺らと同じくらいに見えるな・・・。

「ちょっと、ボケっとしてないで早く注文しておくれよ」

喋り方はおばさん臭えな・・・

「私焼き魚定食！」

「俺は刺身定食で」

「はいはい！焼き魚に刺身一丁！！！」

声でかっ！

2分ほどで注文したのが来た。

「早いね～」

同感だ。

それから席に戻って

さて・・・味の方はどうだ・・・

俺は刺身を一切れ口に入れた。

・・・！

これは・・・！

「うまい・・・」

「ホント！おいしいよね！」

舌触りなめらかだし、旨味が口いっぱいに広がるし、わさびも本わさびだし。

これはうまいと言うしかないだろ・・・

昼飯ろくに食ってなかったから余計にうまく感じる。

「ちょっとあんた達」

「へ？」

「あみゅ？」

いきなり声をかけられから間抜けな声を出した。
出雲なんか頬張り中だったから返事と言えない返事をした。
「あたしの髪飾り見なかった？」
・・・なんだこいつ・・・
口はへの字になってるし、眉はつり上がってるし・・・いかにも不機嫌そうなんだが・・・
「ちょっと聞いてんの！？」
しかもなんか上から目線だし・・・
「髪飾りって・・・どんな髪飾り？」
お、出雲。
いい質問ですね。
「どんなって・・・髪飾りは髪飾りよ！」
え～～～・・・
「それじゃちょっと・・・」
「そんなんで分かるわけねえだろ。バカかお前」
「バ・・・！」

おお、黙った。

「あんた・・・！あたしにそんなこと言っていいと思ってんの！？」

「なんだよ。思ったことをそのまま言っただけだ」

実際そう思ったからな。

「あんた・・・あたしが誰だか分かってんの！？」

「知らん」

「な・・・！」

また黙った。

「あたしを知らない！？この標部　杏奈を！？」

しるすべ・・・あんな・・・

「知らん」

「・・・！」

お、今度は顔がひきつった。

「標部・・・あ！もしかして・・・！」

出雲がなんか気づいた。

「あの標部財閥の！？」

「ふっ・・・その通りよ！」

急に顔が明るくなったな・・・

「あたしは標部財閥の令嬢！」

あの標部財閥のねえ・・・

標部財閥ってのは医療や科学技術、その他いろんな分野で幅をきかしている会社だ。

その娘が今年で１６歳ってのは聞いたことはあるけど・・・

「これで分かった？あたしがどんなにすごいか」

・・・

「そのあたしにバカなんて言うのは失礼極まりないことなの！それが分かったら土下座して謝りなさい！」

さて・・・

「やっぱお前、バカだな」

「な・・・！？」
「し、時雨・・・！？」
こういう奴には教えてやらねえとな。
「あんた・・・まだあたしにそんなこと言うの！？」
「確かに標部財閥はすげえよ。実際いろんな功績を残してるしな。だけど・・・それはお前の親がすごいのであって・・・お前がすごい訳じゃねえ・・・」
「っ・・・！」
「大して世のためになってねえ・・・いや・・・世のために動こうとしてねえ奴が、親の権力を自分のものだと勘違いしてる・・・。だからバカだっていうんだよ！！」
たまにいるからな、こういう奴が。
「この・・・！言わせて置けば・・・！」
お～お～、怒ってますね～。
「あんた・・・絶対許さないから・・・！パパに頼んであんたをこの学園から追い出してあげるわ！」
・・・ったく・・・
「これほど言っても分かんねえのか？はっ・・・そうやってまた親

に頼って、自分では何もしねえんだな。
悪かったよ。訂正してやる。お前はバカじゃねえ。大バカ野郎だ」
「・・・！！」

さらにお怒りだな。

「あわ・・・あわわ・・・」

出雲は何言っていいか分かんなくなってんな・・・
「いいわ・・・！あんたごとき追い出すのなんて・・・あたしの力だけでやってあげるわ！」
「できるもんならな。あと、人のことあんたあんた言うな。俺の名前は方城　時雨だ。覚えとけ」

人はちゃんと名前で呼ぶもんだ。

「方城　時雨・・・！絶対・・・許さないから・・・！」

そういうと標部は歩き去っていった。

「し・・・時雨・・・あんなこと言っちゃって良かったの・・・？」
「いい。俺は後悔してない」

後悔なんざするわけねえ。

何をしてくるか、分かんねえが・・・受けてたってやるよ・・・！

ＳＩＤＥ　杏奈

あたしにあんな屈辱的なことを言うなんて・・・

あいつ・・・！

絶対絶対絶対絶対絶対絶対ぜーーーーーーーったい許さないんだから・・・！

・・・でも・・・あいつの言ってることも・・・間違いじゃないかもしれない・・・

今までずっと・・・パパに頼ってばっかりだった・・・

でも・・・！

あたし一人でもやれるってことを・・・教えてやるわ・・・！！

あ・・・

そういえば・・・髪飾り・・・・

見つけないと・・・・！

あたしの宝・・・・！

ep5　夕食と令嬢（後書き）

〈次回予告〉

標部との決着をつけたいところだが・・・今度はなんか困ってんぞ・・・？

次回　探し物と友達

ep6　探し物と友達（前書き）

またタイトルが予定と違ってしまいました・・・すいません・・・

とにかく、第６話です。

ep6　探し物と友達

「今日は昨日決め損ねてた学級代表を決めたいと思います」

さて・・・昨日の言い合いから一晩を越した訳だが・・・

標部の奴、結局何もしてこなかったな・・・

俺を学園から追い出すとかなんか言ってたのに・・・

当の本人は・・・

「・・・うう・・・」

なんかソワソワしてるし・・・

「誰か学級代表に立候補する人はいますか？推薦でも構いませんよ？」

なんかあったのか・・・？

「はい！」

まあ、俺が心配しても仕方ねえか。

「私は時雨を推薦します！」

そういえば・・・髪飾りを探してるだかだなんだか言ってたな・・・
・・・なんだって・・・？

出雲・・・お前今なんて言った・・・？

「方城君ですね。他に意見のある人はいませんか？」

え？

「ないようですね。では学級代表は方城君に決まりです」

「ええ！？ちょっと待ってくださいよ！」

なんかいつの間にか話が進んでるんだけど！？

学級代表だと！？

何でそんな面倒くさいことを俺がやらなきゃいけねえんだ！？

「何ですか？」

「俺は納得してないっすよ！？」

「・・・文句があるんですか・・・？」

また睨み付けやがった・・・

だが、負けねえぞ・・・！

「あるでしょう！？何でそんな勝手に決められなきゃいけないんすか！？俺の意見は！？」

「じゃああなたは他にふさわしい人がいると言うんですか？」

ぐっ・・・

「い、いますよ・・・！」

「誰です？」

「・・・・・・し・・・・標部とか・・・・」

苦し紛れに何を言ってるんだ俺は・・・

「標部さん・・・ですか？」

「はあっ！？何であたしが！」

だよな・・・

「ほら・・・お前昨日俺を学園から追い出すとか言ってたじゃねえか・・・」

「それが何の関係があんのよ！？」

うぐっ・・・

「学級代表になっておけば・・・そういうこともやりやすいんじゃねえかなぁ・・・って・・・」

「はああ！？あんた訳分かんないだけど！！」

俺自身も訳わかんないことだよ・・・

「言っとくけど、あたしはそんなことやらないからね！！」

ぐうう・・・ここまでか・・・

「方城君、観念してください」

「・・・分かりました・・・」

ちくしょーーーーーーーー！！！

昼休み

「くそ・・・何で俺が・・・」
「いいじゃんいいじゃん！学級代表ってすごいことだよ！」
・・・の野郎・・・
「元はと言えばお前のせいだろうが！！」
「いいじゃ～ん、もう決まっちゃんたんだし」
・・・
ん・・・？
あそこにいんのは・・・
「標部さんだね」
「・・・」
なんかキョロキョロしてるしソワソワしてる・・・
つまりなにかを探しているように見える。
「あいつ・・・今朝もソワソワしてたけど・・・やっぱり髪飾りの件なのか？」
「え？どういうこと？」

理解力ねえなおい・・・

「ほら、あいつ昨日髪飾り探してただろ？それがまだ見つかってねえんじゃねえか？」

「あ～、だからなんか探してるように見えるんだ～」

普通はすぐ分かるだろ・・・

・・・それにしても・・・昨日の夜から探してるのに、まだ見つからねえとは・・・

「時雨、助けてあげれば？」

「は？」

なに言い出すんだこいつは・・・

「なんか困ってる感じだし、一緒に探してあげればいいんだよ」

「いや、お前な・・・俺と標部は今超険悪な仲なんだぞ・・・？」

「それは時雨が余計なことばかり言うからじゃん」

う・・・

「それに標部さんは元々髪飾りを探して貰うために私達に話しかけたんだよ？」

・・・・・・

「時雨は優しいんだから、女の子が困ってたら助けてあげるのは当然だよね？」

・・・・・・

「わーったよ・・・・」
仕方ねえ・・・

「さっすが時雨！」

「う～・・・どこいったのよ・・・・」
「なあ」
「・・・なに・・・・？」
そうにらむなっての・・・

「なんか探してるんだろ？」
「あんたには関係無いでしょ」

「髪飾りだっけか？」
「・・・・」

「大切なものなんだろ？」
「・・・・」
だんまりですか・・・・
しゃあねえ・・・

「俺も手伝ってやるよ」
「・・・・！？」

お、反応した。

「あんた・・・それ本気で言ってんの？」
「本気だが、それがどうした？」

「・・・何であたしを助けようとするのよ・・・・」
「何でって・・・言われてもなあ・・・・」

「昨日のこと、あんたは怒ってないの？」

質問ばっかりだな。

「昨日のことで俺が怒る要素があるのか？」

「だって・・・ちょっと言い過ぎたかなって・・・」

・・・意外だ・・・

「確かにお前口は悪いよな」

「な・・・！」

「それに高飛車だし、生意気だし、おまけに自己中だ」

「うう・・・！」

「でも、いいんじゃねえか？それも、お前らしくてよ」

「・・・あんた、昨日と言ってることが違うわよ・・・」

「お、そうか？じゃあ、昨日のは取り消しだ」

「適当じゃない・・・」

確かに適当だな。

「でも、それが俺らしさだ！」

「・・・」

「ってのはカッコつけすぎたな」

「お前の言う通り、俺は適当な奴だ。だけど、適当な奴は適当な奴なりに考えてんだ。これでもな」

「・・・」

「それと、昨日は俺も言い過ぎた。悪かった！」

「っ・・・！」

俺は心から謝った。

本当だぞ？

「・・・あ、あたしも・・・その・・・ごめん・・・なさい・・・」

おっし！仲直り完了！

「よし！じゃあこれで俺らは友達（ダチ）になった訳だ！」
「え・・・」

何で不思議そうな顔をする？
「ちょっとちょっと時雨！私もー！」

あ、出雲。
すっかり忘れてた。

「私は天崎　出雲！よろしくね！」
「改めて・・・方城
時雨だ。よろしくな、標部　杏奈！」

俺は右手を差し出した。

「え・・・」

なんか戸惑ってんな。

「握手だよ、握手！」
「・・・」

ＳＩＤＥ　杏奈

友・・・達・・・

そういえば・・・あたしって・・・

友達・・・いなかったな・・・

パパは仕事で忙しくて・・・ちっとも遊んでくれなかった・・・

周りにいたのはいつも使用人ばかり・・・

学校とかでも・・・

あたし自身が友達になろうと思ってなかったから・・・

あたし・・・一人になってたんだ・・・

友達なんかいなくても平気って思ってたけど・・・知らず知らずの内に・・・寂しくなってたっけ・・・

だから・・・他人にきつくあたってばかりだったな・・・

でも・・・こんなあたしに・・・友達だって・・・言ってくれるんだ・・・

昨日は印象最悪だったのに・・・

人間って・・・分からないもんね・・・

「おいどうした？握手しないのか？」

・・・

仕方ないけど・・・初めての友達は・・・あんた・・・ううん・・・

時雨でいいわ・・・

「標部　杏奈よ。こちらこそ、改めてよろしくね」

あたしは時雨の手を握り返した。

ｅｐ６　探し物と友達（後書き）

人物紹介の回をやる余裕がないので後書きで紹介することにしました。

今回は出雲です。

名前：天崎　出雲
性別：女
身長：１５５．５？
血液型：ＡＢ型
誕生日：１月２９日

時雨の幼なじみ。

時雨の家の隣に住んでいたが、５年前、つまり小学５年の時親の都合で引っ越した。

中学は普通の公立。

その後、勉強嫌いだが死ぬほど勉強して光天寺学園に入った。

そこで時雨と偶然再会した。

幼いころに、いじめっこから助けてくれた時雨にずっと恋心を抱いている。

アプローチはしているのだが、時雨がスーパー唐変木なので思いはあまり伝わってない。

いつも明るくマイペース。だが他人への気配りが上手い。

学力は低い。

運動神経はそこそこ良い。

好きなものはポップコーンと甘いもの。

嫌いなものは勉強と茄子。

ルックスは普通にかわいい。

プロポーションも良い。

ある部分は大きい方。

髪は焦げ茶が混ざった黒で、肩くらいまでの長さ。

少しくせっ毛。

勉強は嫌いだが音楽だけは唯一の得意教科。

一人称は「私」

次回は湖倉　薊理事長の紹介です。

〈次回予告〉
標部は事情を話してくれた。
さて、犯人探しといくか！

次回　宝と捜索

ep7　宝と捜索（前書き）

どうも！第7話です！

ep7　宝と捜索

「さて・・・これで俺がお前を助ける理由はできたな！」
「え・・・？」
おいおい・・・まだわかんねえのか・・・？

「友達が困ってたら助けるのが普通だろ？」
「そうそう！」
出雲、俺の話に乗っかるな・・・

「そういうもんなの？」
「そういうもんだ！」
「・・・」

「話してくれるよな」

「・・・仕方ないわね・・・あたしはいつも髪飾りを肌身はなさず持ってるんだけど・・・昨日の昼休み、昼食をとりに食堂に行って、注文をとりにいったとき、汚したくないからテーブルに置いていったの・・・」

なるほど・・・

「それで、注文をとって戻ったら、髪飾りがなくなってた・・・って訳か・・・」
「そう・・・」
「でも、汚したくないんだったら、普通にポケットに入れとけばよかったんじゃないの？」
・・・やっぱりアホだな・・・
「壊れやすいものだったんじゃねえか？」
「ええ・・・ガラスでできてるから・・・ちょっとしたはずみで割れる可能性があって・・・」
「ああ～・・・」
「一応聞くけど、その髪飾りはお前にとって大切なものなんだよな？」
「ええ・・・私の宝よ・・・」
宝・・・
「色々ありそうだな・・・」
「勘がいいわね・・・」

「え？え？」

出雲・・・お前ちょっと黙ってろよ・・・

「あたしのママはね、３年前に亡くなったの。病気でね・・・」

・・・

「パパと同じように、ママも仕事ばっかやってて・・・体の抵抗力が弱ってたんだって・・・」

（杏奈は悲しげな表情で話し続ける）

「・・・亡くなる１ヶ月前に、一緒にショッピングにいったの。普段そういうことは全然しないから、あたしすっごく嬉しかった・・・」

・・・

「その時、ママがあたしに買ってくれたのが・・・綺麗なガラスの髪飾り・・・特別値段が高い訳でもないけど・・・ママが初めてあ

たしにくれたものだから・・・とても大事にしたわ・・・」

・・・

「その後、ママが死んじゃって・・・あたし・・・すっごい泣いたわ・・・。悲しくて・・・悲しくて・・・何もやる気力が湧かなかった・・・。だけど・・・そんなときに・・・髪飾りを見て・・・元気出そうって・・・。
ママが最後に残してくれた思い出・・・それを忘れさせないでくれた・・・。
だからあの髪飾りは・・・あたしの宝物なのよ・・・」

「お前にも・・・色々あったんだな・・・」
「あうあうう・・・」

出雲が泣いてるよ・・・

「親を失う悲しみはよくわかる・・・」
「・・・まさか、あんたも・・・」
「ああ・・・二人とも、事故でな・・・」

あんまし思い出したくねえけどな・・・

「だからといって、同情なんかしなくていいぞ。今俺は、幸せだからな・・・！」

「幸せ・・・？」

「おう！俺は一人じゃねえからな！姉さんもいるし、出雲もいる。それにお前だっているからな！」

「っ・・・！・・・なによ・・・調子いいこと言っちゃって・・・」

ん？

気のせいか・・・？

顔が赤くなってるような・・・

何でだ？

「あ・・・話がずれてきたな。本題に戻そう。その髪飾りがお前にとって大切なものなのは分かった。問題はそれがどこにいったかだ」

それが分かんなきゃな。

「昼食をとりに行ってた数分の間になくなった・・・食堂はもう探したのか？」

「そんなのとっくにやったわよ・・・・！」
う～ん・・・ってことは・・・
「誰かに盗まれた可能性が高いな・・・」
「え・・・！？」
「実際その髪飾りは高価じゃなくても、標部財閥の令嬢の所持品だ。ブランドものだとか思ったんだろ」
「じゃあ、誰が盗んだって言うのよ・・・」
「そこまでは分からん」
「なによ！役立たず！」
ひでえな・・・
「仕方ねえだろ・・・食堂は全校生徒が使うんだ・・・そんな中、犯人だけを特定するのは難し過ぎる」
「う～・・・」
「とりあえずもう一回食堂に行ってみようよ！何か手がかりが見つかるかもしれないよ！」
それが今できる事だな・・・
「よし、現場検証といくか！」

食堂

「このテーブルなんだな？」

「ええ、間違いないわ」

なるほど・・・特に怪しいものが落ちてる訳でもなく・・・

足跡がある訳でもない・・・か・・・

「ねえ時雨、この傷なんだろ？」

あ？

俺は出雲が差すところを見ると、テーブルの脚に3センチくらいの傷がついていた。

「なんだ・・・？」

何でこんなところに傷が・・・

「相島さん！その指輪かっこいいっすねえ！」

なにやら話声が・・・

あいつら確か2組の・・・

「そうだろう・・・！これは俺のお気に入りだからな」

「相島　宏太・・・相島グループの御曹司よ・・・・」

「知ってるのか？」

「パーティーで何回か会ったことがあるわ・・・・」

金持ちはすげえな・・・

「この薔薇のフォルムがいかしてるだろ？」

「はい！マジいいっす！」

「男なのに薔薇って・・・・」

「ただの自慢ね・・・・」

・・・

「標部・・・あいつに何か恨まれたりしてねえか・・・？」
「え・・・？・・・前にさんざん罵った時はすごく怒ってたけど・・・。なに・・・？あいつが犯人なの・・・？」

「確証はねえが・・・多分な・・・」

「何でそう思うの？」

「そりゃあ、捕まえる時のお楽しみだ・・・！」

どういぶりだすか・・・

「お前らにも手伝ってもらうからな」
「いいよ！」
「当たり前じゃない！あたしの髪飾りなんだから！」

さて・・・やってやるか・・・！

ep7　宝と捜索（後書き）

今回は理事長を紹介します。

名前：湖倉（こくら）　薊（あざみ）
性別：女
身長：１３７．３？
血液型：Ｂ型
誕生日：５月５日

光天寺学園の理事長。

１０歳でありながらＩＱ２００という驚異的な頭脳を持つ天才。

そのため飛び飛び級の特例として光天寺学園の理事長になった。

性格は無邪気で少し生意気。その上泣き虫と非常に子供っぽい。

また物忘れが激しかったり、気まぐれ極まりなかったり、騙されやすかったりと、天才でありながらバカである。

好きなものはオレンジジュースとアニメ。

嫌いなものはお化けと野菜。

見た目は普通の１０歳の少女で愛くるしい顔をしている。
彼女から発せられる涙目＋上目遣いのコンボはとてつもない破壊力である。
髪の色は深紅。
全く整えないのにきれいなストレートである。
長さは腰くらいまで。
一人称は「ウチ」
語尾に「～じゃ」がつく。

次回は空巻先生です

〈次回予告〉
犯人の目星はついた。

さあ、推理ショーと行こうじゃねえか！

次回　犯人と拳

クズ野郎は・・・俺がぶん殴る・・・！

ep8　犯人と拳（前書き）

〈時雨〉「時雨だ。今回は作者の水面が不在だから俺が進行役をやらせてもらう。とりあえず、第８話だ」

ep8　犯人と拳

第三者視点

「～～♪」

相島　宏太は廊下を歩いていた。

「あ、あの！」

「ん？」

いきなり呼ばれたのでその方向を向く相島。

「確か君は・・・1組の天崎さんだったかい？」

「うん・・・あの・・・その・・・き・・・キレイな指輪だね・・・！」

「ああこれか。ほら、もっとよくみていいよ」

「ありがとう・・・」

相島は天崎　出雲に自分がはめてる薔薇の指輪を見せた。

「俺に何か伝えたいことがあるんじゃないか？」

「あ・・・・あの・・・放課後・・・体育館裏に来てくれない・・・？」

「ああ、いいよ」
「じゃあ・・・待ってるから・・・」
そう言うと天崎　出雲は去っていった。
「ふっ・・・俺も罪な男だ・・・」

ＳＩＤＥ　時雨

「時雨、言ってきたよ！」
「おう、サンキュ」
見事な演技だったよ・・・

「もう・・・好きでもない奴にあんなこと言うなんて・・・」
「悪い悪い、礼はちゃんとするからよ。それで・・・どうだった？」
「うん・・・時雨の言った通り、尖ってる部分が少し欠けてた。それに傷との幅も同じだったよ」
やっぱしか・・・

「これであいつが犯人なのね・・・！」
「いや、まだ決めつけるのは早い」
「・・・じゃあどうすんのよ・・・？」
「俺が最後の確認に行ってくる」
「確認って・・・？」
「まあ見てなって・・・」

いっちょかまかけてやるか。

俺はさりげなく相島に近寄った。

「なあ、ちょっといいか？」
「なんだ？」
「友達の髪飾りを探してるんだけど・・・見なかったか・・・？」
「いや、知らないな」

・・・一つ・・・・

「そうか・・・どうすっかな・・・壊れたりしたら・・・」
「まあガラスは割れやすいからな」
「そうなんだよ・・・」

・・・決まりだ

「他の奴にあたるか・・・悪いな」
「ああ、早く見つかるといいな」

俺は相島から離れ、出雲と標部のところへ戻った。

「なにが確認よ！ただ話してただけじゃない！」

「あいつで決まりだ」
『え・・・！？』

ユニゾンで驚くなよ・・・

「どうして分かったの！？」
「教えなさいよ！」

「分かった分かった、話すから静かにしろ」

――――――――――

「あ～なるほど～・・・・」
「そういうことね・・・・」

説明終了と。

「あいつ・・・絶対許さない・・・・！」
「うんうん！」

「許す許さないはとりあえず後でだ。もう午後の授業だ」

授業中

そして終了

「ふう・・・終わった・・・・」

「時雨、放課後だよ！」

出雲がきた。

「早く行くわよ！」

標部も。

そうあせるな・・・

「言われなくても分かってるっての」

さあ、犯人暴きの時間だ・・・！！

体育館裏

「や、待ったか？」
「いえ、全然！」

出雲に呼ばれた通り、体育館裏に来た相島。

「さあ話はなにかな？」
「実は話があるのは私じゃないの！」
「え・・・？」

「俺たちだよ」

俺と標部は隠れていた陰から出てきた。

「な・・・！？」

びびってやがるよ。

「単刀直入に言うぞ・・・標部の髪飾りを何故盗んだ・・・？」

「・・・！？」

動揺してんな・・・情けねえ・・・

「・・・何のことだ・・・」

「すっとぼけてんじゃないわよ！！あんたが盗んだってことは分かってんだからね！！！」

迫力あるな標部。

「はっ・・・髪飾りだかなんだか知らんが、俺が盗んだっていう証拠はあるのか？」

証拠・・・な・・・

「ああ、あるぜ」

「っ・・・！」

「第一に、お前が今はめている指輪だ」
「何・・・！？」
さあ・・・いくぜ・・・！
「標部が髪飾りを置いたテーブルの脚に傷がついていた」
「それが・・・どうした・・・！」
「食堂のテーブルの脚は鉄で出来てんだ。簡単に傷がつくもんじゃねえ。なにか硬くて尖ってるもので引っ掻くとかしねえと・・・そう・・・ちょうどその指輪みたいにな」
「・・・！？」
「薔薇を象った指輪だっけか？それなら花びらのとことか、さぞかし尖ってるだろうなあ・・・」
「・・・俺がこの指輪でテーブルの脚を引っ掻いた確証はどこにもない・・・！」
粘るねえ・・・

「そのテーブルの近くに・・・赤い欠片が見つかったんだよ・・・よくみて見ろ、その指輪」

「・・・！・・・欠け・・・てる・・・・」

「これで、テーブルの脚に傷をつけたのはお前だ。おそらく・・・盗むとき、何かの拍子に引っかけたんだろ」

「ぐ・・・・！」

大分焦ってんなあ・・・

「確かに、その傷をつけたのは俺かもな・・・。だが・・・偶然どこかでついたかもしれないんだ・・・。だからそれが盗んだ理由にはならない・・・！」

・・・へっ・・・・

「確かにそうだな。これだけで決めるのは少し無理がある・・・。だけど・・・さらに決定的証拠がある」

「なんだと！？」

「俺が髪飾りを探してるって言った時、お前はすぐに『知らない』と言った。普通はもう少し話を深く聞いてやるもんだが・・・お前は髪飾りの件に触れたくなかったから・・・すぐに返事を返したんだ」

「・・・！」

図星みたいだな。

「そして・・・次が決定的証拠だ・・・」

そろそろ詰みだな・・・

「俺が壊れたりしたらどうしようかと言った時・・・お前はなんて言った・・・？」

「・・・さあな・・・」

答えたくないか・・・

「なら、自分の声聞いて確かめてみな」

「・・・！？」

俺はポケットから小型の録音機を取りだし、スイッチを入れた。

《どうすっかな・・・壊れたりしたら・・・》
《まあガラスは割れやすいからな》

「・・・・・・！！」

悔しそうな顔してるな。

「俺は『壊れる』と言っただけだ。なんの材質かは言ってねえ。なのに何でお前はガラスだって言ったんだ？」

「ぐ・・・！！」
「簡単なことだ・・・髪飾りを盗んだ奴しか知り得ないことを知っている・・・。つまりお前が髪飾りを盗んだ張本人なんだよ・・・！！」

「・・・」

「もう言い逃れはできねえぞ」

「・・・く・・・」

・・・？

「くくく・・・・」

笑ってる・・・・！？

「へっ・・・とんだ名探偵がいたもんだ・・・。そうだ・・・その女の髪飾りは俺が盗んだ・・・」

開き直りか・・・

って・・・・！

標部が前に歩み出た・・・

「よくもあたしの髪飾りを盗んだわね！」

おい、あまり刺激しない方が・・・

「うるさい！元はと言えばお前が悪いんだ・・・・！」

なに・・・？

「あたしがあんたになにをやったって言うのよ！」
「お前は・・・この俺にバカと言ったんだ・・・！」

・・・・・・は？

「・・・なによそれ・・・」
「とぼけるな！この前のうちのグループのパーティーで・・・――
――――

『やあやあこれは、標財閥のお嬢様じゃないか。一緒にお茶でもどうだ？』

『いやよ』

『・・・俺の誘いを断るのか・・・・？』

『はあ！？なに自惚れてんの！？バカじゃない！？』

『なに・・・！？』

『あんたの誘いなんか嬉しくもなんともないんだけど！ていうか気安く話しかけないで！！』

『ぐう・・・！』

――――親にも言われたことがない言葉を・・・お前は言ったんだ！あんな屈辱を受けたのは初めてだ・・・！」

バカかこいつ・・・

「そんなことで・・・あたしの髪飾りを盗んだの！？」

「そんなことだと・・・！？この・・・！」

嫌な予感が・・・

「やっぱりあんたバカじゃないの！！？」

「黙れ・・・！」

「そんなくだらないことで・・・あたしの宝物を・・・・！」

「宝物・・・？ほう・・・これはそんなに大切なものなのか・・・・」

「っ！！」

な・・・今この場に持ってきてやがったのか・・・・！

「返しなさいよ！！」

標部は取り返そうと手を伸ばすが、相島はそれを掴んだ。

「ちょっ・・・離しなさい・・・・！」

「宝物か・・・じゃあ・・・これを壊したら・・・お前はどういう反応をするんだろうな？」

「っ！？」

・・・何だと・・・？

「なにしようとしてるのよ・・・・！」

「叩きつけて壊してやる！！」

「な・・・！や、やめなさいこのバカ・・・・！」

・・・・・・

「時雨！どうしよう・・・！！！」

・・・・・・

「時雨・・・？」

・・・・・・クズが・・・・・・！！！

「俺が受けた屈辱を・・・」

相島は髪飾りを持った手を振りかぶった。

標部は手を掴まれているためそれを止められない。

「思いしれ！！」

相島は髪飾りを地面に叩きつけようとした。

「いやぁ！！やめて・・・！！！」

その時・・・

ガシッ・・・・！

「な・・・・！？」
相島は腕を掴まれた。

「いい加減にしろ・・・・このクズ野郎が・・・・！！！」
間一髪のところで、時雨が止めていたのだ。

「くだらなねえ理由で・・・人の宝物を盗んで・・・終いにはそれを壊そうとしやがって・・・・！」
俺は相島の腕を掴んでる手に力を入れた。

「い・・・が・・・・!!」

相島は痛みに苦悶の声を出す。

「標部・・・離れてろ・・・」

「え・・・あ・・・・うん・・・・」

掴まれていた手が解放された標部は時雨の言われた通りにした。

「お前・・・俺に手を出したら・・・ぐ・・・、俺の親父が黙ってねえぞ・・・・!」

お前の親父だあ・・・?

「知るか・・・!てめえみてえなクズは・・・俺が・・・ぶん殴ってやるよ・・・・!」

俺は右拳に力を入れた。

「おい・・・まさか本当に・・・・！やめろ・・・・！！」

「歯ぁ食いしばれ！！！」

「やめ・・・・！」

ドゴォッ！！！！

時雨の右拳は正確に・・・

相島の顔面をとらえた

ep8　犯人と拳（後書き）

〈時雨〉「まずは人物紹介だな。今回は空巻先生だ」

名前：空巻　菜奈
性別：女
身長：１６１．２？
血液型：Ｏ型
誕生日：４月４日

光天寺学園教員。
１年１組担任。

現在２５歳。

見た目は優しそうな雰囲気だが、実際はサディストで毒舌。

酷いことを笑顔で言える。

その経歴は不明。

好きなものは血の滴る生肉（ユッケ）と酒。

嫌いなものは校則を守らない人。

端から見れば恐ろしく感じるが、分かり合えれば割りと話せる。

見た目は普通に美人だが、性格が災いして独身である。

髪は肩を少し越えるくらいの長さでアホ毛がある。

髪色は赤がかかった黒。

合気道の有段者。

一人称は「私」

口癖は「血祭りにしますよ？」

〈時雨〉「これで終わりだな。ちなみに何故今日作者が不在かっていうと・・・さっきの人物紹介書いてる時に何者かの手によって血祭りにされたからだ。

何者かが誰かは・・・まあ分かるだろ・・・。さて、最後に次回予告だ」

〈次回予告〉
髪飾りが戻って良かったぜ。
それに標部の奴・・・

次回　笑顔と初恋

やっぱ笑顔って大事だよな

ep9　笑顔と初恋（前書き）

どうも・・・作者です。前回は血祭りになってましたが、何とか復活しました。

〈時雨〉「お前が悪いんじゃねえの？」

うるさい！

とにかく今回は・・・

〈時雨〉「第９話だ」

俺の役目とるなあああああ！！！

ep9　笑顔と初恋

「がっ・・・・」

相島は時雨に殴られその場に倒れた。
それと同時に相島の手から髪飾りが滑り落ちた。

おっと・・・・

俺は髪飾りを地面すれすれでキャッチした。

どこにも・・・・傷はついてねえな・・・・

良かった・・・・！

「ぐっ・・・・！くそ・・・・！」

お？案外タフな野郎だな。

「俺を・・・・殴ったな・・・・！親父に頼んで・・・・お前をこの学園から追い出しやる・・・・！」

「あたしと同じこと言ってる・・・」

「お前らは・・・もう終わりだ・・・！」

・・・

「どうしよう時雨・・・！本当に退学になっちゃったら・・・！」

「その心配はありませんよ」

『・・・！』

空巻先生・・・いつの間に・・・

「いかなる組織も、この学園の生徒に手は出せませんから」

そうなのか・・・

「それより、相島君。あなたは職員室に来てもらいますよ」

「え・・・」

「え・・・、じゃありません。一部始終見せて貰いましたから」

「う・・・！！」

この人なにもんだよ・・・

「あなたは少々やり過ぎましたね。校則に窃盗ありとは書いてませ

んよ？」
「ひ・・・！」
他にもっと問題なのが書かれてるけどな・・・
「それじゃあ行きましょうか。楽しみです。生徒を血祭りにするのは久しぶりですから♪」
「ひいぃ！！頼む・・・！誰か・・・助けてくれえええぇぇぇぇ・・・〉
連れていかれた・・・
やっぱりあの先生怖え・・・
「なんか・・・ちょっとかわいそうかも・・・」
「そうでもないわよ」
あ・・・そうだ・・・
当初の目的・・・
「標部」
「・・・！」
俺は髪飾りを標部に渡した。

「ちゃんと取り返したぜ。お前の宝物」

「・・・良かった・・・・！」

嬉しそうな顔しやがって・・・

「良かったね！」

「ええ、あんたたちのおかげよ！！ありがとう！！」

笑った・・・

へっ・・・何だよ・・・

「お前、もっと笑った方がいいぞ」

「え？」

「いつも不機嫌そうな顔してるけど・・・

笑うとかわいいじゃねえか」

「・・・！！／／／」

あれ？顔真っ赤になった・・・？

「あ、あああああんた・・・ななな何言ってんのよ・・・・！ば・・・ばばばばバカじゃないの・・・・！？」

「カミカミだぞ・・・？」

「うう・・・うっさい！！バカ・・・！」

何でこんなに言われなきゃいけねえんだ・・・？

「う～・・・！」

なんか出雲が頬膨らませて唸ってるし・・・

なんだってんだよ・・・

ＳＩＤＥ　杏奈

「とにかく！あ、あたしはもう部屋戻るから・・・！髪飾りありが

とね・・・・！」
「おう」
「また明日ね～」

杏奈の部屋

なによあいつ・・・・！

あんなストレートに言うなんて・・・・！！

『笑うと　かわいいじゃねえか』

・・・ボンッ！！

ああもう！！

何でこんなにドキドキすんのよ・・・！！
ちょっと助けてもらっただけじゃない・・・！
・・・でも・・・よく考えてみたら・・・普通にかっこいいし・・・
優しいし・・・
これが・・・恋・・・ってやつなの・・・？

はっ・・・！？
なに考えてんのあたし・・・！？
そんなのあるわけ・・・
〈標部～いるか～？〉
「ふきゃあああああああ！！？」
何！？何であいつが！？

あたしは焦りながらドアを開けた。

「お前・・・すごい声出してたけど・・・大丈夫か・・・・？」

「何でもないわよ！！」

顔が・・・まともに見れない・・・・！

あたし・・・顔赤くなんかなってないわよね・・・

「顔赤いぞ？熱でもあるんじゃねえか？」

嘘・・・・！？

赤くなってんの・・・・！？

「な、ないわよ！それより、なんの用よ・・・・！！」

「いや・・・夕食・・・一緒に食べねえかって・・・・」

・・・・・・！？

何で！？

何でこんなに積極的なの！？

「まあ標部の都合が悪いんならいいけどな。出雲もいるし」

むっ・・・！

「行くわよ！！行ってあげるわよ！仕方ないから！！！」

「お・・・おう・・・」

もうこの際どうとでもなれよ・・・！

「それと！あたしのこと「標部」って、名字でよばないで・・・！」

「じゃあなんて呼べばいいんだ？」

～～～～～！！！

いちいち聞かないでよ・・・！！

「あ・・・「杏奈」でいいわよ・・・」

「そうか、分かった。じゃ、杏奈、行くなら早く行こうぜ。席なくなっちまうよ」

「わ、分かってるわよ・・・！」

悪くないわね・・・名前で呼ばれるのも・・・

「あと、さっきの髪飾り、着けてみたらどうだ？」
「え・・・？」
「似合うと思うぞ」
「・・・・・・！！！／／／」

な・・・なんなのよ・・・

なんなのよこいつ～～～～～！！！

ＳＩＤＥ　時雨

・・・

何であんなに赤くなってるんだ？

・・・

分からん・・・

今日も唐変木な時雨であった・・・

ep9　笑顔と初恋（後書き）

今回の・・・
〈時雨〉「今回の後書きは話の都合上人物紹介はなしだ。」
・・・
そのかわり・・・
〈時雨〉「そのかわりゲストを呼んだぞ」
〈出雲〉「こんにちはー！」
〈時雨〉「何でこいつを呼んだのか分からねえな・・・」
〈出雲〉「ひどっ・・・！」
・・・
〈時雨〉「ん？どうした作者？」
お前が俺のセリフ取ったんだろうがあああああ！！！
〈時雨〉「ああ、悪い悪い」
全く・・・作者を何だと思ってるんだ・・・！
〈出雲〉「まあまあ！で、今回は何をやるの？」
ん？
ああそうそう。
実はですねえ、今回から『時雨，Ｓトークタイム』というのを始めるんですよ。

〈時雨〉「何だそりゃ？」

テーマに沿って時雨とゲストが話し合うという企画です。

〈出雲〉「楽しそー！」

〈時雨〉「そうか・・・？」

そんじゃ早速いってみましょう！

今回のテーマは「恋」です！

〈時雨〉「初っぱなから結構なやつがきたな・・・」

さあ時雨！君は恋について何を思う！？

〈時雨〉「さあなぁ・・・恋なんてしたことねえからなぁ・・・」

・・・つまんねえ～・・・・

〈出雲〉「はいはーい！」

お、さすが出雲！元気がいいですね！

さあ！Ｙｏｕの意見言っちゃいなよ！

〈時雨〉「どこぞの事務所の社長だお前は・・・」

〈出雲〉「えーとね、すごく大事なことだと思うよ！」

それは何故？

〈出雲〉「だって『恋する乙女は強くなれる』って言うじゃん！」

ほほ～、中々良いね～！

どこかの唐変木とはえらい違いだ。

〈時雨〉「そりゃ誰のこと言ってんだお前・・・？」

さあ、誰でしょうね？

〈出雲〉「それに、実際私も強くなれたもん！」

いいね～！

ナイスな心意気だ！

〈時雨〉「強くなってこれか？」

〈出雲〉「うっ・・・・」

・・・確かに・・・

〈出雲〉「ま、まだ成長途中だもん！」

〈時雨〉「ほぉ・・・・」

なっはっはっは！

まあ、君たちはどっちもどっちだ！

〈時雨／出雲〉『ぐっ・・・・！』

ま、とりあえず、今回はここまでです。

次回は湖倉　薊理事長を呼びたいと思います！

〈時雨〉「マジか・・・・」

マジです！

それではまた次回！
最後次回予告です！

〈次回予告〉
色々あったが、一件落着・・・って思ったら・・・！？

次回　髪飾りと一名様追加

俺の平穏な学園はどうなるんだよおおお！！！

ｅｐ１０　髪飾りと一名様追加（前書き）

さて、第１０話です。
〈時雨〉「杏奈を中心とした話は今回で終わりだな」
ではどうぞ。

ep10　髪飾りと一名様追加

翌朝

ＳＩＤＥ　杏奈

「・・・ん・・・」

もう・・・朝なの・・・

杏奈は起きた。

うう・・・お腹減ったわ・・・

昨日の夕食は緊張して全然食べれなかったし・・・

あいつのせいで・・・

・・・はっ！

なにあいつのことなんか考えてるのよ・・・・！？

もう授業の準備しなきゃ・・・・！

――――準備中――――

顔洗ったし制服もＯＫ！！

髪も整えたわ！

・・・あ・・・・

あたしは鏡台の隣の棚に置いてある髪飾りを見た。

『着けてみたらどうだ？』

・・・

『似合うと思うぞ』

・・・あいつに言われたからつけるんじゃないから・・・！

あくまであたしの意思よ・・・！

あたしはガラスの髪飾りをつけた。

・・・どう・・・かしら・・・

あたしは鏡を見た。

自分の澄んだ茶髪に映える、コバルトブルーの華をつけている用だった。

悪く・・・ないわね・・・

・・・って・・・・！もう7時半じゃない！？

あたしは時計を見て現在の時刻を確認した。

急がなきゃ！食堂の席がなくなっちゃう・・・・！

あたしはすぐに部屋を出て食堂えと走っていった。

（少し時間をさかのぼる。）

ＳＩＤＥ　時雨

俺は目覚まし時計の音で目が覚めた。

うるせえな・・・

あ・・・もう朝か・・・

じゃあ日課の携帯チェックと行くか。

えーと・・・メールが５２件・・・着信履歴が３８件・・・

全部姉さんからか。

いつも通りだな。

出雲の奴は・・・

「むにゃ・・・はふ・・・」

まだ寝てるか・・・

あのうるさい目覚ましでよく起きないな・・・

・・・同世代の男女が同じ部屋で生活なんて・・・問題があると思ったが・・・案外大丈夫なもんだな。

（君だけですよｂｙ作者）

現在時刻は・・・６時１５分か。

そろそろ起こしてやるか。

「おい出雲、起きろ！」
「ん・・・にゃ・・・」

起きない・・・
しゃあねえ・・・

「あ、超高級スイーツ食べ放題だー」（棒読み）
「（ガバッ）どこどこ！？」

起きた。

昔からこれで起きるんだよなこいつ・・・

「よお、おはよう」
「時雨？あれ？スイーツ食べ放題は？」
「ない」
「なんだぁ・・・」

そしていつも本気で信じる。

はっきり言えばバカだな。
「さっさと準備しろ。お前時間かかるんだからよ」
「うん」

実際出雲は朝すげえ時間がかかる。

理由は・・・

「今日も見事にはねてるな～」

寝癖だ。

完全に重力に逆らってるはね方・・・いや・・・これはもう「はねてる」という言葉では言い表せねえな・・・。

「爆発してる」これが正しい。

「お前、一体どういう寝方したらそうなるんだよ・・・」

「わかんない」

そうですか・・・

「とにかくさっさと直せ」

「うん」

さて、俺は自分の準備をするか。

1時間後

遅え・・・

「最後のはね・・・！」

やっと最後か・・・

「むむ・・・・！・・・・よ～し！直った～！」

終わった・・・・

長かった・・・・

「終わったなら早く食堂行くぞ」

「うん！」

食堂

うわ～・・・・混んでんなぁ・・・・

「どこか席空いてねえかな・・・・」

「ん～・・・・あ！あそこ空いてるよ！」

でかした出雲！

俺達は3人座りのテーブルを確保。

「ギリギリだったぜ・・・・」

「ち・・・ちょっと・・・・！」

あ？

「そ・・・そこ座ってもいい・・・かしら・・・・。他に・・・・空い

てないのよ・・・」

杏奈か。

なんか赤くね？

「ああ、いいぞ」

「あ・・・ありがと・・・」

ちょうど3人用だしな。

「じゃあ、ご飯とりにいこー！」

「ああ」

俺達はカウンターに行った。

「今日は何にするんだい・・・って・・・まあ・・・かわいい女の子二人も連れて歩くなんて・・・両手に花だねぇ」

「な・・・！」

「はにゃ！？」

「え！？」

なに言ってんだよこの人・・・

何故こうもババくさい・・・

「ちょいとあんた、失礼なこと思ってんじゃないよ。私はまだ17歳だよ！」

この学園には心を読める奴が何人いんだよ・・・

「かわいい・・・かわいい・・・」
「・・・」
・・・出雲は「かわいい」に妙に反応してるし・・・
杏奈はうつむいてる・・・
そんなに気にする言葉だったか・・・？
「ほら、混んでるんだから早く決めておくれよ」
「へいへい・・・」

そんでもって、今日の朝食は・・・
俺　焼き魚定食
出雲　朝ご飯セット
杏奈　ベーコンエッグトーストとチキンサラダ

「お前ら・・・いつまでボケっとしてんだ？」
「はっ・・・！」
「う、うるさいわね・・・！あたしの勝手でしょ！？」

・・・怒られた・・・
何故だ・・・

「いただきまーす！」
「い、いただきます・・・！」

また杏奈が不機嫌そうに・・・

・・・ん・・・？

あ・・・

「杏奈」
「なに？」

「髪飾り、つけたんだな」
「あ！ホントだ！」

「・・・なによ・・・！文句あんの・・・！？」

「いや・・・」

・・・すげえな。

「似合ってんな。いいと思うぜ？」

「・・・・・・！！！／／／」

ありゃ・・・・？

真っ赤になった・・・

「うんうん！かわいいよね！」

「・・・／／／」

何故顔が赤いか分からねえ・・・

「・・・もしかして・・・照れてるの？」

「・・・！／／／」

図星の顔だ。

「お前・・・」
「な・・・なに・・・よ・・・？」
「女の子らしい一面もあるんだな」
「・・・・・・！！！！！／／／」

茹で蛸みてえに真っ赤だな・・・
気のせいか・・・頭から湯気が出てるような・・・

「どうした？」
「・・・う・・・うるさいわね・・・！何でも・・・何でもないわよ・・・！！！！」
おお！？
すげえ勢いで食べ始めたぞ・・・！？
「ごちそうさま！！！」
早っ！！！
そして行っちまった・・・
「どうしたんだあいつ・・・？」

「え！？時雨今ので気づいてないの！？」

・・・？

「なにをだ？」

「・・・・・・やっぱり時雨って・・・・唐変木・・・・」

・・・何でだ・・・？

ＳＩＤＥ　杏奈

もう・・・！

訳わかんないあいつ・・！

何であんなことがひょいひょい言える訳・・・！？

もう・・・無理よ・・・！

あんまり信じたくないけど・・・

あいつのこと・・・

好きになっちゃったわよ・・・！！！

いいわ・・・！

あたしを惚れさせるなんて・・・いい度胸してるじゃない・・・・！

それなのに出雲にも優しくしてるなんて・・・！！

絶対・・・あたしに惚れさせてやるわ・・・！

そのためには・・・まず・・・！！

空巻先生は・・・

いた！

「空巻先生！！」

「はい、なんでしょう標部さん？」

「お願いがあります！」

時間すっとばして

放課後

ＳＩＤＥ　時雨

・・・どういうことだ・・・？

「なんで・・・杏奈ちゃんが私達の部屋にいるの・・・？」

「空巻先生に頼んだのよ」

「なんの為にだ？」

「そんなのあたしの勝手でしょ！？」

いやいや！？

ここは俺の部屋ですよ！？

「とにかく！今日からあたしもこの部屋に住むから！！」

なにぃ！？

「・・・時雨との・・・二人きりの空間が・・・」

出雲！？お前なに言ってんだ！？

「ふふ・・・出雲・・・！あんたには負けないわよ・・・！」

「・・！私だって・・・負けないよ・・・！」

何だ！？

何の話だ！？

「つうかベッドは二つしかねえんだぞ！？どうやって三人で住むんだよ！？」

「あんたが床で寝ればいいでしょ！」

はいいいいいいいぃ！！？

「ふざけんなぁごらぁ！！！」

「時雨！それなら私と一緒に寝ようよ！」
「断る！！」
くそったれがあ！！
「もう俺が出てってやらぁ！！」
『それはダメ！！』
腕掴まれた！！
「感謝しなさいよ！あたしと同じ部屋で過ごせるんだから！！」
感謝する意味が分からないんだけど！？
「時雨～！私と一緒に寝ようよ～！！」
「しつこいわボケぇ！！！」
あああああ！！！
こんちくしょおおおお！！！
何で俺が・・・
こんな目にあわなきゃならねえんだあああああああああ！！！！！

ｅｐ１０　髪飾りと一名様追加（後書き）

後書きです。

では時雨，Ｓトークタイムいってみましょう。

〈時雨〉「今回のゲストは・・・」

〈薊〉「ウチの出番なのじゃー！」

光天寺学園の理事長、湖倉　薊ちゃんです。

〈薊〉「今日は特別に来てやったのじゃ！」

〈時雨〉「何であんたはそんなに上から目線なんだよ・・・」

一応理事長ですからね。

〈薊〉「一応じゃないのじゃー！ちゃんとしたりじちょーなのじゃー！」

「りじちょー」て・・・かわいい・・・

〈時雨〉「おい作者、変なこと言ってないで早く今回のテーマを教えろ」

ああはいはい。

今回のテーマは『アクセサリー』です。

〈時雨〉「またやりにくいのが来たな・・・」

〈薊〉「あくせさりーなら任せるのじゃー！」

さすが理事長！頼もしい！

〈薊〉「当然なのじゃ！」

では理事長！いつもどんなアクセサリーをつけてるんですか！

〈薊〉「つけてないのじゃ」

・・・

〈時雨〉「そんなこったろうと思ったぜ・・・」

あんた今「任せる」って言ったよな？

〈薊〉「言ったのじゃ！」

でもアクセサリーつけてないの？

〈薊〉「つけてないのじゃ！」

あんたどうしてここに呼ばれたか分かってる？

〈薊〉「知らんのじゃ」

・・・このガキ・・・！

〈時雨〉「作者、落ち着け！相手は子供だ！俺が話すから！」

・・・いいでしょう・・・。

では時雨、君はどんなアクセサリーをつけてる。

〈時雨〉「俺も普段はあんましつけねえが、たまにブレスレットくらいはつけるぜ」

どんなブレスレット？

〈時雨〉「プラチナねやつで特に装飾はついてねえな」

プラチナ・・・！？いくらしたのさ！？

〈時雨〉「姉さんからもらったから、値段は知らねえな。まあ結構高かったんじゃねえの」

・・・小夜すごいな・・・

〈薊〉「こらぁ！ウチにも何か聞くのじゃー！」

・・・好きな飲み物は・・・？

〈薊〉「オレンジジュースなのじゃー！」

はい、ありがとうございましたー。

帰っていいですよー。

〈薊〉「うん！」

〈時雨〉「あ・・・本当に帰っちまったよ・・・」
子供は扱いやすくていいですねー。
では今回はここまでです。
〈時雨〉「このコーナーすげえグダグダじゃね・・・？」
そう思うならもっと頑張ってください。
次回のゲストは君のお姉さんを呼びたいと思います。
〈時雨〉「はあ！？嘘だろ！？」
嘘じゃありませーん。
〈時雨〉「俺は嫌だからな！？」
文句は言わせません。
では次回予告です。

〈次回予告〉
光天寺学園に入学してからの初めての休日。
ゆっくりゲームしようと思ったのによ・・・
次回　休日と買い物

俺の財布がダメージを受けたぜ・・・

ep11　休日と買い物（前書き）

最近めっきり寒くなってきましたね。

第１１話です。

ep11　休日と買い物

ＳＩＤＥ　時雨

朝か・・・

俺は体を起こし自分のベッドの両隣で・・・

「すう・・・すう・・・」

・・・

「ん～・・・むにゃ・・・」

「・・・はぁ・・・」

寝息をたてている二人を見てため息をついた。

ため息つきたくなるっての・・・

昨日は結局空巻先生に頼み込んでベッドを一つ増やしてもらったんだ・・・

それで寝床問題は解決したけど・・・

他にも色々と問題があるわけで・・・

「ん・・・ん～・・・・」

あ・・・

杏奈が起きた・・・

「ん～・・・・？・・・・」

・・・俺は今杏奈の方を見ていない。

何故かって？

簡単なことだ・・・

パジャマがはだけてるんだよ・・・

「・・・。・・・・・・・・!?／／／」

気づいたか・・・

「い・・・いやあああああああ!!!!」

「（ドゴッ!）ごはぁっ!!」

何故・・・殴られた・・・!?

「変態変態変態変態ーーーーー!!!!」

ういい・・・!?

動いたせいで・・・!

「ま、待て杏奈!とりあえず隠せ・・・!やばいことになってるって・・・!!」

「・・・!!／／／」

ほとんど全裸になってるっての・・・!!!!

「あ・・・あ・・・／／／。・・・見るなーーーーーー！！！！」

８０８号室に・・・

俺が殴られる音が・・・

朝っぱらから・・・

盛大に・・・

響いた・・・

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「いっ・・・てえ・・・」
頬がヒリヒリするぞ・・・
「この変態・・・！」
んな・・・

「俺は悪くねえだろ！？」
「でも見たでしょ！？」
「見てねえ！俺はすぐに目を反らした！」

事実だ！

「な・・・何よそれ・・・！？ちょっとくらい見なさいよ！あたしに失礼じゃない・・・！！」

ええええええええ！？

意味分かんないですけど！？

「全く・・・ちゃんと見たいって言えば・・・別に・・・」

何だ？

声が小さくて聞こえねえ・・・

「お前今なんて言ったんだ？」
「な・・・何でもないわよ・・・・！バカ！！」
ええ～・・・・

「うにゅ～・・・おふぁよ～・・・・」
出雲が起きたか。
わーお、今日も見事な爆発っぷりで。
「今何時～・・・・？」
「８時半だ」
「ええ！？」
何だ？
超焦ってベッドから降りた・・・
「遅刻だよ～！！」
・・・
はい、ちょっとここで確かめとこう。

「出雲、今日は何曜日だ？」
「え・・・？」

お～、考えてる。

「・・・あ・・・」

気づいたな。

今日は土曜日。授業は無し。

この学園入って初めての休日だ。

「何だ～・・・遅刻かと思ったよ～・・・」

やっぱバカだな。

「あ！そうだ！」

出雲が何かを思いついたような声を出した。

「時雨！どっか出かけない！？」

は・・・？

なーにを言い出すんだこいつは・・・

「良いわね。せっかくの休日だし」

杏奈まで・・・

せっかくの休日っていうんなら・・・俺はゲームしてえよ・・・

「どこ行こうか？」

「ショッピングとかどう？」

「ああ～！いいね～！」

どんどん話進めてやがる・・・

「待てお前ら、俺は行くなんて言ってな・・・」

『ダメ』

ユニゾン・・・

「一応聞くが・・・俺に断る権利は・・・・？」
『ない』

再びユニゾン・・・・

俺の休みが・・・・

ＳＩＤＥ　出雲

これって・・・デートだよね・・・・！

二人きりじゃないけど・・・・

でも・・・うん・・・・！

頑張ろう！

ＳＩＤＥ　杏奈

これって・・・デートなのかしら・・・

邪魔者もいるけど・・・

いいわ・・・！

このデートであたしに惚れさせてあげる・・・！

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

俺たちはショッピングモールに来た。

もちろん私服でだ。

それにしても・・・

「何でお前ら・・・俺の腕にひっついてるんだ・・・？」

現在、俺の両腕には出雲と杏奈がそれぞれひっついてる・・・いや・・・抱きついてると言った方がいいか・・・

「いいのいいの！こうしてたいから！」

「あんたが気にすることじゃないわよ・・・・！」

いやいや・・・

歩きづらいんだけど・・・

それに・・・腕に・・・当たってるし・・・

この状態はすごいつらい・・・

「最初はどの店にしようか？」

「やっぱり服よ！」

「じゃああそこだね！」

テンション高えよこの二人・・・

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

服って・・・こんなにあるんだな・・・

着るもんはあんましこだわらねえからな・・・

「沢山あるーーー！」
「品揃えはまあまあね。あたしの家にあるのと同じくらいかしら」

そうか・・・忘れてた・・・

杏奈は俗に言う「お嬢様」ってやつだったな・・・

服とかアクセサリーには困らねえってわけだ・・・

「時雨！これどうかな！」

出雲が早くも持って来た。

スカイブルーを基調とした夏っぽさを前面に出したワンピースが・・・

・

「とりあえず試着したらどうだ？」
「うん！そうする！」

出雲は試着室に入っていった。

ファッションとかはあんまし分からねえが、似合う似合わないは分かるからな。

「・・・」

杏奈は何もしてねえ・・・

「杏奈は何も見ないのか？」

「あたしの気に入る服がない！」

あ・・・そうですか・・・

・・・

会話が続かねえ・・・

・・・あ

「またつけてんのか、その髪飾り」

「文句ある？」

「いや、ねえけど・・・」

よっぽど気に入ってんだな・・・

「どうかなー！」

出雲が試着室から出てきた。

「あら、結構いいじゃない」

・・・確かに

「時雨はどう思う？」

「似合うんと思うぞ」

うん、実際似合ってる。

「えへへ・・・そうかな・・・・」

「買うのか？」

「・・・」

迷ってる・・・

「まあそりゃお前の自由・・・・」

「これくださーい！！！」

決めるの早っ！！！

出雲は１８０００円の服を買うのに2秒しかかからなかった。

「じゃあ、早く次行くわよ！」

「おう」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

ここは・・・

「ケーキ屋・・・か・・・」

「雑誌で見たのよ！ここがおすすめだって！」

お嬢様でも雑誌とか読むんだな。

「わあああ～～～～・・・！！」

出雲の目がキラキラしてる・・・

甘いもの好きだったな・・・

「どれにしようかなあ～！普通のショートケーキもいいし、こっちのチョコのやつもいいな～！ああ！でもこっちのブルーベリーのやつも～！」

早く決めろ・・・

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「おいしかった～」
「中々良い店じゃない」
確かに、雑誌で取りあげられてるだけはあるな。

「あ、いい忘れてたけど、これあんたのおごりだからね」
「なにぃ！？」

「お会計、３８２０円になります」
高ええええ！！！

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

その後も色々回った。
小物買ったり、アクセサリー買ったり、ソフトクリームおごらされたり・・・

途中で昼食もとった。

そんであっと言う間に夕方。

「楽しかったねー」

「ま、そこそこ充実した休日だったわ！」

「そりゃ良かった・・・」

俺の財布は結構なダメージを受けたけどな・・・

「ん・・・？」

「どうしたの？」

「いや・・・誰かに見られてると思ったんだが・・・」

「気のせいでしょ。帰るわよ」

「あ、ああ」

絶対誰かの視線を感じたと思ったんだけどなぁ・・・

ＳＩＤＥ　？？？？

物陰に隠れていた者が一人。

やるわね・・・

私の気配を感じとるなんて。

ますます気に入っちゃったわ♪

方城　時雨君・・・

あなたを絶対に私の部活に入れてあげる♪

ep11　休日と買い物（後書き）

早速いきましょう。
時雨，Ｓトークタイム！

〈時雨〉「俺は逃げるぞ！」

ダメです。逃がしません。それでは今回のゲスト、時雨の姉、方城小夜さんです。

〈小夜〉「こうして出てくるのはプロローグ以来だね～。読者の皆お久しぶりで～す！」

〈時雨〉「ああ・・・来ちまった・・・」

はい時雨君、テンション低くならない。

今回のテーマは・・・

〈小夜〉「時雨だよー！」

うお！？いきなりですか！？まあ合ってるんですけどね。

〈時雨〉「合ってんのか！？」

はい。小夜が来るんで、そうしました。

〈時雨〉「俺に自分のことで話し合えってか！？」

いえ、その必要はありません。今回は全部小夜に話してもらいますんで。

〈小夜〉「任せてー！」

それじゃお願いします。

〈小夜〉「んとねー、時雨はカッコよくて、優しくて、かわいくて、面白くて、強くて、きれいで、渋くて、一生懸命で、純粋で、頭がよくて、運動神経抜群で、それでいて謙虚で、とってもとっても自慢の弟だよ～」

はい、見事なブラコン発言ありがとうございました。

〈小夜〉「だから私は時雨を好きで好きで好きで好きで好きで好きで好きで好きで好きでたまらないんだよ～」

これは最早ブラコンっていう領域じゃないですねー。

トークというよりはただ弟を自慢しに来たって感じですね。

〈時雨〉「もうこのバカ姉やだ・・・」

〈小夜〉「お姉ちゃんにバカなんて、ひどいなー。あ！時雨ってＳ？」

〈時雨〉「違う！」

〈小夜〉「もう時雨ったら・・・作者さんもいる前で・・・でも、時雨がやれって言うんなら・・・この場でＳＭプレイも・・・」

〈時雨〉「するかぁ！！！」

はっはっは。お二人は仲睦まじい兄弟ですね。

〈小夜〉「そうだよねー。ありがとう作者さん♪」

〈時雨〉「水面ぉ！お前なに言ってんだよ！？」

さあ。

〈時雨〉「てめぇ！！」

〈小夜〉「時雨～、作者さんを悪く言っちゃだめだよー？そんなことより、二人でどっかい行こー？ねぇ？」

〈時雨〉「わ、待て姉さん！引っ張るな・・・！やめろ！！！」

時雨よ・・・諦めろ。

〈時雨〉「嫌だ！頼む作者！助けてくれ！頼む！！！助けてくれぇぇぇぇぇぇ！！！〉

あー・・・いっちゃいましたね。

では今回はここまで。次回は人物紹介です。

〈次回予告〉

日曜日にいきなり部屋に来た2年生。一体何の用だ？

次回　先輩と勧誘

ep12　先輩と勧誘（前書き）

更新遅れてすいません！何分テスト期間だったもので・・・

とにかく！第１２話です！

ep12　先輩と勧誘

今日は日曜日。

昨日は買い物に行ったから疲れた&財布大ダメージだ。

今日も買い物なんか行ったら一ヶ月はゲームや漫画を買えなくなる。

つまり俺の生きる源を絶たれることと同じだ。

だから今日はゆっくりとしたいんだが・・・

そういう俺の願いを完全無視するするバカがいるんだよな・・・

「ねえ時雨ー、どっか遊びに行こうよー」

こんな風に・・・

なあ出雲、お前は幼なじみを少しはいたわってやるという気持ちはないのか？

「そうよ、どっか連れていきなさいよ」

バカは一人じゃなかったか・・・

昨日あれだけ俺の財布にダメージを与えておいてさらに追撃する気か？

弱ったところにとどめを刺そうってのか？

お前らは俺を殺す気なのか？
もしそうならお前らはどれだけ『非』人道的だ。
「昨日行ったろ。今日はなしだ」
『えーーーーー・・・』
ユニゾンで言うな。二人の力を合わせてもダメなものはダメだ。
「つまんなーい」
「あんたあたしに退屈な思いをさせろって言うの？」
いや、そんなことを言われれも困るんだが？
俺の都合というものを少しは考えろよ。
「お前らそんなに言うなら二人で行ってくりゃあいいじゃねえか」
俺は正論を言った筈だ。
『それじゃ意味ない（よ／でしょ）！！』
なのに何故こんな答えが返ってくるんだ？
遊びに行くのになにも俺が行かなくてもいいだろう？
それともなんだ。そこまでして俺に金を使わせたいのか？
金をゲームと漫画ばっかに注ぎ込んでる俺があんまし強く言えるもんじゃねえけど、それは酷すぎだと思うぞ。

「じゃあ聞くが、どうして俺と行きたいんだ？」
こういう疑問は実際に聞くのが一番だ。
「そ、それは・・・」
「え・・・えーと・・・」
何故そこで言葉がつまる？
しかもちょっと顔が赤いのは何でだ？
「そ・・・その・・・あ、あんたの・・・ことを・・・」
「・・・！？（杏奈ちゃん、抜け駆け！？）」
俺のことを、なんだ？
それに何でこんなに顔が赤い？熱でもあるのか？
「その・・・う・・・うううぅ・・・。」
何か言うのなら早く言ってもらいてえんだが。
「・・・ああもう！！そんなのどうでもいいでしょ！？バカ！！」
えええええええええ！？
自分から話そうとしといて何で怒るんですか！？
俺なんか悪いことしたか！？
あ・・・でも理由聞いたのは俺か。

それで怒ってるんだとしても・・・ちょっと言い過ぎじゃね？

「ふん！

（危なかったわ・・・！あたしからは言わないって決めてるのに・・・！時雨からよ・・・！絶対に時雨から『好き』って言わせてやるんだから・・・！）」

あらら、完全に機嫌悪くなっちまったよ。それでもどことなく顔が赤いように見えるのは俺の気のせいだろうか？

「ほ・・・

（良かったぁ・・・抜け駆けされなくて・・・。時雨に想いを伝えるのは私が先がいいもん・・・。）」

そして出雲の奴は何故かホッとしたような顔してるし・・・

なんか良いことでもあったのか？

「（・・・というか何で気付かないのかなぁ・・・。結構アプローチしてるのに・・・鈍いのは昔からだけど・・・いくらなんでも鈍すぎだよ・・・。ホント唐変木なんだから・・・）」

なんだ？今度は呆れたような顔をされたぞ？

「出雲、どうしてそんな顔で俺をみてるんだ？って・・・杏奈もかよ・・・。二人ともどうしたんだ？」

『・・・はぁ・・・』

ユニゾンため息!?

何故だ!?しかも息ぴったりだったぞ!?

俺が何をしたっていうんだよ・・・

本当・・・女ってのはよく分からねえ生き物だ・・・

そんな時、俺らの部屋のドアが開いた。

鍵かけてた筈なんだが・・・どうやって入った?

俺達が玄関の方へ行くと一人の女子生徒が悪戯っぽい笑顔で立っていた。

「方城時雨君ね?」

俺の名前を知ってるだと!?

・・・いや、そんなに驚く話でもないか。1年では見かけねえ顔だから、もしかして上級生か?だとしても何故ここに?

俺に何の用だ?てか誰だ?

「黙ってるってことは、間違いなさそうね」

「ああ」

間違ってはいねえよ、確かに。『時雨』なんて珍しい名前、滅多にいねえだろうからな。

「私は2年2組の学級代表、稲波瀬（いなはぜ）　水無月（みなづき）。よろしくね時雨君♪」

会っていきなりウィンクされるとは思わなかったぞ。てかこの人やっぱり2年、しかも学級代表か。まあそれはどうでもいいんだけどな。とりあえず聞いとくか。

「どうやってここへ入ったんすか？」

この部屋の鍵は一つしかねえ。それはもちろん俺が管理している。ちゃんと戸締まりもやってあった。なのに何でこの人は入れた？という至って当然な疑問だ。

「ピッキングしたの♪」

わーお、ちょっと予想外な答えが返ってきたぞ。ピッキングしたって？鍵を見た限りじゃこの扉の鍵穴はめちゃくちゃ複雑だと思うんだけど。それを開けたってのか？しかもピッキングしてる時の音が聞こえなかったぞ。無音でやったってのか？もしそうならこれは最早称賛に値するな。空き巣の達人になれるんじゃね？

「言っておくけど空き巣なんかならないわよ？」

ここにも読心術を会得している奴がいるとは・・・

いつも思うことだけどこの学園ってやっぱりおかしいよな。

「で、稲波瀬・・・先輩でしたっけ？俺に何の用っすか？」

そして最も聞かなければならない質問をした。さっさと終わらせてくれ。なぜだか知らんが、さっきから後ろに怖い視線を感じてるん

だ。

「まあ大したことじゃないのよ。君に私の部活に入ってもらおうと思って♪」

部活？

あ、そういえばあるなこの学園にも。結構多かったよな。

まあ要するにこの人は部活勧誘に来たんだな。何で俺なのかは分からねえが。

「それで、部活ってどんな部活っすか？」

内容しだいでは入ってもいいな。中学では入ってなかったから、少し憧れの念もあるしな。

「楽園部っていうの♪」

・・・なんだそりゃ・・・

「楽園」って・・・何がどんな風に「楽園」なんだ。どんな活動するんだよ・・・

「活動内容は、皆でワイワイしたり、ゲームしたり、イチャイチャしたり、ムフフなことやったり、とにかくやりたいことが自由にできるの。ね、楽園みたいでしょ♪」

なるほど、つまりは自分たちの好きなことができるのか。ムフフなことは深く考えないようにしておくか。

俺的には最高だけど、そんな部活があっていいのか？部を創るには理事長の許可が必要なのに・・・いや、あの理事長ならテキトーにＯＫ出しそうだ・・・

「入る？入るわよね？ＯＫ！入部決定♪」

・・・は？

「というより、もう時雨君の入部届け出しちゃってるんだけどね♪」

・・・は！？

ちょっと待て。この人何考えててんだ！？勝手に何やってんの！？人の意見無視どころか聞いてもいないんですけど！？

「ち、ちょっと待ってくれ！俺は入るなんて一言も言ってねえ！！」

いきなり入部とか訳わかんねえよ！？

「こらこら時雨君。年上には敬語を使いましょうね？」

話をそらしてんじゃねえよ！！

『あ、あの・・・！』

おお！出雲、杏奈！助けてくれるのか！？

ありがてぇ！この人を止めてくれ！

『私(あたし)も入っていいですか・・・・！？』

「全然ＯＫ！大歓迎よ♪」

止めるどころかさらに悪化させやがったー！！

何入るとか言ってんだよぉ！！余計に断りにくい状況になっちまったじゃねえか！！

「じゃあ詳しい話は明日するわね。じゃあね♪」

帰りやがった・・・

断る隙を作らせずに・・・

もう自分勝手ってレベルじゃねえぞこれ・・・

「時雨、一緒の部活ね♪

（これで時雨とイチャイチャできる♪）」

「あたしと同じ部活なんだから、幸せに思いなさい♪

（これであたしに惚れさせてあげるわ♪）」

こいつらもなんか嬉しそうだし・・・

俺には一生平穏な生活は来ないのか・・・？

だというのなら神よ・・・俺はあんたを恨んでやる・・・！

ＳＩＤＥ　水無月

勧誘成功♪これで部員が増えるわ♪

ああいうカッコいい子は、他に取られるまえに取っとかなくちゃね♪

でも間近で見ると本当にカッコいいわね・・・私とあろうものがちょっとドキッとしちゃったわ・・・

見た感じ性格は良さそうだし・・・もう二人の女の子から好かれてるのがその証拠ね。

私も混ざっちゃおうかな♪

なんてね♪

さあ、明日が楽しみだわ♪

ｅｐ１２　先輩と勧誘（後書き）

後書きです。
申し訳ありませんが予定していた人物紹介は作者の都合上次回に持ち越しということにします・・・
では次回予告です。

〈次回予告〉

稲波瀬先輩に強制的に入部させられた楽園部。その実態は・・・

次回　部活とポーカー

あの人はどれだけ強いんだよ・・・

ep13　部活とポーカー（前書き）

更新遅れてすいません！第13話です！

ep13　部活とポーカー

「それじゃ、部の詳細を説明するわね♪」

この人の部活勧誘という名の不法侵入があってから滞りなくつぎの日になり、朝食の時間。俺と出雲と杏奈が座っているところに、いきなり現れて話し始めた。

「楽園部の活動内容は昨日話した通り。活動場所は４階の第３資料室。使われてなかったから部室にさせてもらったわ」

「許可は取ってるんすか？」

「取ってないわ♪」

おい・・・それでいいのか？

・・・良さそうだな・・・この学園なら・・・

「部員は何人いるのよ？」

「私とあなたたちを含めて５人よ」

「５人て・・・俺らの他に１人しかいないんすか！？」

「ええ、私の友達♪」

少な過ぎるだろ！？そんな少人数でやっていけんのかよ！？

「活動日はいつですかー？」

「毎日♪」

・・・もう俺はツッコまねえぞ。この人の発言にいちいちツッコんでたらこっちが参っちまうよ。
クールにいこうクールに。

「つまり、今日もあるってことっすね？」

「その通り♪さすが時雨君、ものわかりがいいわね♪」

そりゃどうも。俺もあなたのその自己中心的さには怒りも呆れも通り越して感心の気持ちを覚えますよ。

「まあそういうことだから、今日の放課後に来てね♪」

そう言って稲波瀬先輩は去っていった。
出来ればもう二度と来ないで欲しい。

「なんか・・・すごい人だよね・・・」

「世界は自分を中心に回ってる、って思ってそうね・・・」

激しく同感だ二人とも。あの人なら本当にそう思っているに違いない。

そんなことを思っていると、予鈴がなり始めた。

「やばっ・・・！」

「急がなきゃ！」

俺たちは急いで片付けて教室へと向かった。

そして放課後。

『・・・』

今俺たちは４階の第３資料室の前にいるんだが・・・ボロボロだぞ・・・。

ドアが歪んでるし・・・所々傷がついてるし・・・汚えし・・・何より全く人の気配がしない・・・

しかも４階のこの辺りは明かりが少ないし弱いから、全体的に薄暗い。

まさに何かが出そうな雰囲気だ・・・

「ち、ちょっと・・・本当にここで合ってるの・・・？」

「間違いない・・・筈だ・・・」

４階の第３資料室と言ったらここしかない。

「お化け出てきそう・・・」

「ちょ・・・やめてよ出雲・・・！」

なんだ、杏奈の奴震えてるじゃねえか。そういう話は苦手なのか。
かわいいところあるじゃねえか。

「とりあえず・・・入ってみる？」

「そうするか」

俺たちは第3資料室のドアを開けた・・・と思ったら、

「ぐ・・・開か・・・ねえ・・・！」

扉が歪んでるからか・・・！？全然・・・開く気配がしねえ・・・！

「こんのぉ・・・！」

「頑張って時雨！」

「早く開けなさいよ！」

お前ら・・・んなこと言うんなら、少しは手伝え・・・！

「ぬあああ・・・！」

「あの・・・」

『・・・・!?』

なんだ!?いきなり後ろから声がしたぞ!?

・・・って人か・・・。一瞬本当に出たかと思っちまったよ・・・

「そのドア・・・鍵開いてませんよ?」

・・・早く言ってくれよ・・・

第3資料室内

「さっきは驚かせてごめんなさい」

「いえ、気にしないでいいっす」

この人が稲波瀬先輩が言ってたもう1人の部員か・・・

普通の人に見えるが、油断しちゃ駄目だ。この学園はどんな人がいるか分かったもんじゃねえ。

「君たちがミナの言ってた新入部員ですね」

あ、稲波瀬先輩「ミナ」って呼ばれてるんだ。ちょっとかわいいな。

「私はミナの親友でこの部活の副部長。2年2組の沙良(さら)　暦(こよみ)と言います。よろしくお願いします」

騙されちゃ駄目だ・・・こういう礼儀正しい人ほど内心なに考えてるか分かんねえんだ。

「こちらこそよろしくお願いしまーす！」
出雲が挨拶しかえした。元気がいいようで何よりだ。
「出来れば君たちの名前も教えてもらえますか？」
そんくらいならいいか。
「方城　時雨です。一応1年1組の学級代表やってます」
「天崎　出雲です！時雨の幼馴染み！」
「標部　杏奈。標部財閥の令嬢」
名前の後にミニ情報言うのはお決まりなのか？
まあどうでもいいけど。
「時雨君に出雲ちゃんに杏奈ちゃんですね」
そして名前を反芻する。これもお決まりのパターンだよな。
お決まりってのはやりやすいけど、何回もやると飽きられるぞ。まあ俺はお決まりベタベタな展開は嫌いじゃないけどな。
そんなことを考えてると部室（こう呼んでいいのだろうか？）のドアが勢いよく開いた。
誰が来たかは・・・安易に予測できる。
「どう、やってる？」
俺をこの部活（部活と呼んでいいのかも分からないが）に誘って（

というよりは強制）くれた稲波瀬先輩その人だ。

「ミナ、遅いですよ」

「ごめんごめん。ちょっとシャワー浴びてたから」

確かに少し髪が湿ってる感が・・・あれ？つまりそれってちゃんと乾かせてないってことだよな。髪はしっかり乾かさないと駄目だと思うぞ。

というか何で部活に出るのにシャワー浴びる必要があるんだ？別に汗掻いた後って訳でもないだろうし。

まあそんなこと考えても全く意味はないけどな。

「よし！じゃあ部活を始めるわよ！」

そう言って稲波瀬先輩がなんか持ってきた。・・・トランプ・・・？

「今日の楽園部の活動はトランプよ！」

「勝手に決めるんすか？」

「だって私が部長だもん！私が好きなようにやるのは当然なことなのよ！」

・・・なんとなくこの部活の本当の意味が分かってきた。自分の好きなようにできるから楽園部というか名前って言ってたが、「自分」ってのは各々個人のことじゃなくて稲波瀬先輩のことだと思う。つまりこの部活は稲波瀬先輩の自由にできる。「楽園」というのは稲波瀬先輩だけにとって、ってことか。俺らにとっては楽園でもなん

でもねえじゃねえか。入んなきゃ良かったぜ・・・

「私トランプ好きなんですよー！何やるんですか？」

「ポーカーよ！」

「ふふ、ポーカーならあたしも得意よ！先輩には悪いけど、負かしてあげるわ！」

どういうことだよ。出雲も杏奈もやる気満々じゃねえか。これじゃ断れねえ。

「時雨君はポーカーは得意ですか？」

ポーカー？俺にポーカーが得意かだって？俺を誰だと思ってるんだ。ゲームと名のつくものならなんでもござれだ。カードゲームだって例外じゃねえ。

「得意ですよ。めちゃくちゃ。だから負けた時の言い訳考えておいたほうがいいですよ」

軽く挑発の意を込めて返す。

「あらあら・・・言うわね～・・・」

「楽しみです」

なんか先輩二人の顔が怖くなってきたのは俺の気のせいか？だけどこれくらい言っとかねえと相手の精神は揺さぶれねえからな。ゲーム開始前から戦いは始まってんだ。これくらいはしとかねえと。

「それじゃあ・・・ゲーム開始よ！」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

結果

稲波瀬水無月の1人勝ち

「時雨君、言い訳考えた？」

稲波瀬先輩の勝ち誇った顔がウザったい・・・

まさかここまでとは・・・何もんだよ・・・

初っぱなから「ロイヤルストレートフラッシュ」を出すとか、どんな強運の持ち主だ。見たことねえ。

その後もどんどん強い役が揃うし、最早運が良いという言葉では表せねえと思う。

だけど負けは負けだ。そんなことをグダグダ言ってちゃゲーマーの名が廃る。

「負けました。俺の完敗っすよ」

「潔いわね♪じゃ♪」

その瞬間俺の手が後ろで縛られた。

「へ？」

何がどうなってるんだ？いきなり手の自由が聞かなくなって・・・

あ・・・足も縛られた。

「何やってんすか？」

縛ったのは言うまでもないが稲波瀬先輩だ。この人は何をやろうとしてるんだ。この学園入ってからおかしなことばかりだからこんな事されてもすごく冷静になれるようになってきたな。嬉しいんだか悲しいんだか・・・

「何って、君の手足を縛ってるのよ♪」

分かるわボケ。

「い、稲波瀬先輩！何やってるんですか！？」

「そうよ！ていうかそのロープどこから取り出したの！？」

おお、出雲に杏奈。今度は止めてくれるか。助けてくれ。

「ミナは常に懐に縄を忍ばせてるんですよ」

そして説明ありがとう沙良先輩。だけど出来れば縄を忍ばせてる理由も言って欲しかった。

「良い忘れてたわね。ゲームで一番になった人は好きな人に好きなことができるの♪」

あ～、なるほど。だから俺は縛られた訳か。まあゲームで負けた罰ゲームみたいなもんか。

「それで、俺に何をするんすか？」

「ちょっとお願いがあるだけよ♪」

お願いがあるだけでは人の手足を縛る理由にはならないと思いますよ先輩。

「その、お願いとは？」

「私の奴隷になって♪」

「断固拒否で」

「もう、冷たいわね～」

冷たいもくそもあるか。奴隷になれと言われて「はいなります」って言う奴がいると思ってんのか。

「じゃあ別のお願いにするわ」

おおそうしてくださいよ。ていうかさっきから出雲と杏奈が何か考

えてるんだけど・・・

「（ゲームに一番になったら好きことができる・・・つまり・・・時雨に・・・。よし！次の部活は頑張って一番になろう！）」

「（良いことを聞いたわ・・・これで時雨に・・・。絶対一番になってやるわ！）」

お二人ともなにか決意したようで。決意することは良いことだ。内容にもよるけど。

「う～ん

・・・何がいいかなぁ・・・」

「どうでもいいからこの縄ほどいてくださいよ」

「だめよ。そしたら時雨君逃げちゃうじゃない」

否定できない・・・

「あ！こういうのはどう？私が時雨君の奴隷になる♪」

「却下」

何を言うと思ったら・・・。奴隷にさせるのがダメでも奴隷になるのは良いと思ったのか？

この人の思考回路はどうなってるんだ。

「それくらいいいじゃない。ねえご主人様♪」

「許可してませんのでその呼び方はやめてください」

「そんなこと言って、本当は嬉しいんじゃないの～？」

「嬉しいですよ」

「・・・」

あれ？何で皆黙るんだ？俺何かおかしいこと言ったか？

「それ本当？」

自分から言ってきたのに・・・

「本当ですよ？稲波瀬先輩みたいな美人に言われたら普通は良い気分がするでしょう？」

事実だ。稲波瀬先輩は性格はどうしようもないが見た目は普通に・・・いや、かなり美人なんだ。そんな人に「ご主人様」とか言われたら嬉しいのが普通だろ。

『・・・』

なんか出雲と杏奈がこちらをものすごい睨んでるんだけど。俺何か悪いことしたか？

「・・・／／／」

そして稲波瀬先輩が赤くなってるような気がするのは俺の気のせいか？

「どうしたんすか」

「え・・・いや・・・あの・・・」

「ミナはそういうことを面と向かって言われたことがないから照れてるんですよ」

ああ、意外だ。

「暦、そういうことは言わない方が良いと思うわよ？」

「ごめんなさいミナ」

沙良先輩絶対謝る気ねえな。反省の色が感じられねえもん。

「・・・今日はもう終わりにしましょ」

「もうっすか」

「気分が乗らないの」

自分勝手だな本当に。始まりも終わりもこの人の自由か。

「じゃ、次の部活日はまた連絡するから。またね♪」

そう言って稲波瀬先輩は部室から出ていった。

「じゃあ私も失礼しますね」

続いて沙良先輩も。
残ったのは俺たち三人。
「・・・あんたってさ、誰にでもああいうことが言える訳？」
「ああいうこと？」
ああいうことってどういうことしょうか。
「意識せずにってことね・・・」
だからなんのことだ。
「だから時雨は手強いんだよ・・・」
「そうみたいね・・・」
さっきから何を話しているんだよこの二人は。俺の何が手強いんだ。
『はあ・・・』
そしてなぜユニゾンため息なんだ。
「帰ろっか・・・」
「そうね・・・」
そして二人は帰っていった。

「・・・」

「なんか色々さみしい感じがするのは気のせいなんだろうか・・・」

そう言った俺の声も一人きりの部屋には虚しく響いた・・・

ｅｐ１３　部活とポーカー（後書き）

今回は前回で言った通り人物紹介をしたいと思います。一人だけですが・・・

名前：標部　杏奈
性別：女
身長：１５１．８？
血液型：Ｂ型
誕生日：６月１７日

標部財閥の令嬢。亡くなった母親がくれたガラス製の花の髪飾りを宝物にしている。

髪飾りがなくなった時に協力してくれ、自分がドキドキするような事をしれっと言う時雨に最初は戸惑いも感じていたが、色々あって自分が時雨に恋をしていると自覚する。

その後は時雨に積極的にアプローチしている。
出雲は恋敵であり親友でもあると思っている。

お嬢様育ちのためか高飛車で上から目線。さらにわがまま。だが人を思いやる気持ちはある（と本人は言っている）。
容姿は「きれい」というよりも「かわいい」部類に入る。少しつり目。

髪は澄んだ茶髪でセミロング。くせっ毛は全くない。

勉強は文系は時雨並にできるが理数系は壊滅的である。本人曰く「あんなぐだぐだした計算やってらんないわよ！！」との事。

運動神経は良い。特にリレー系が。

好きなものはパスタと紅茶。

嫌いなものはワサビと怖いもの。

一人称は「あたし」。

基本目上でも敬語は使わない。

〈次回予告〉

近づいてきたのは高校一つ目の大イベント。正直楽しみだ。

次回　体育祭の選手決めと何かがちがう両手に花

ｅｐ１４　体育祭の選手決めと何かがちがう両手に花（前書き）

まず、すいません。

自らの発言をくつがえしてしまいました。詳細は活動報告を見て下さい。

では第１４話です。

ｅｐ１４　体育祭の選手決めと何かがちがう両手に花

光天寺学園に入学してからはや一ヶ月がたった。

相変わらず出雲はバカだし、杏奈は上から目線だし、理事長はガキだし、空巻先生は怖いし、稲波瀬先輩は自己中だし、沙良先輩はなに考えてるか分かんねえし、まあとくに問題が起きた訳でもねえからある意味平和な学園生活かもしれねえな。

ちなみに姉さんからの着信履歴は１０００件を越えた。

そんな学園生活の中で一つ目のでかいイベントが近づいてきた。なにかって？

そりゃもちろん・・・

「今日は体育祭の詳細をお話しします」

そう、体育祭だ。体育祭をやる時期はだいたい梅雨前か秋が多い。この光天寺学園もその辺は他の学校と同じらしく梅雨前に体育祭がある。

興味ない・・・というのは嘘で、正直言えばものすごく楽しみだ。本来俺はインドア派だが学校行事とかになると話が別になる。俺は意外と行事に燃えるタイプなんだ。練習は死ぬほどやって本番では良いものを見せる。それが俺のポリシー。そのためにクラスの奴等のモチベーションをあげるため色々とやったな。やらないやつには軽く体罰・・・じゃなくて説得だ、説得。まあ説得したのは男子だけで女子は言わずもがな俺に賛同してくれたな。何故かは知らんが。

まあそんなこんなだから中学の頃は「学校行事の鬼」と呼ばれていた。実はこの異名結構気に入ってる。

「まず誰がどの競技に参加するかを決めたいと思います」

俺がそんなことを考えてると空巻先生が話を進めていった。

「最初に代表リレーですが、これはやはり足が速い人が良いでしょう」

足が速い・・・ね。さて誰がなるのやら。

「このクラスで一番足が速い人は誰ですか？」

「先生、この間のスポーツテストの結果を見ればいいんじゃないでしょうか」

一人の生徒がそう言った。なるほど。それが一番確実だな。この前スポーツテストがあったからな。まあ俺は普通にやっただけだけどな。

「そうですね。ええと・・・」

空巻先生は無数にある書類の中から目的のものを探し始めた。

「あ、これですね。ええと・・・」

そして見つけ出した。

「一番速いのは方城君ですね」

うん。なんとなく予想はしてたさ。この小説の性質から考えてこういう時は必ず俺が選ばれるんだ。ホント嬉しいんだか悲しいんだか。

「すごいですね。１００メートルのタイムが１０秒３ですよ」

『おおおおおお！！！』

空巻先生がそれを言った途端にクラスから歓声があがった。

「さすが容姿端麗、文武両道のパーフェクト男方城！！」

「イケメンで頭良くてさらに運動神経も抜群だなんて！藍夏感激！ますます惚れちゃう！」

「これで代表リレーはいただいたぜ！」

クラスがうるさくなってきましたよ。そんなにすごいこと・・・だとは思うけど、いくらなんでも騒ぎ過ぎじゃね？

「しかももう二人も女子を侍らせてんだぜ！？」

いやいや。侍らせてる気は全くないんだが。

「ていうか天崎さんと標部さん、どっちが本命なの！？」

「はにゃ！？」

「な・・・！？」

本命って一体なんの本命なのか、そして出雲と杏奈が赤くなってる理由を誰か教えてくれ。
ていうかこんなに騒いでると・・・

「皆さん静かにしてください。さもないと口を開けないように口を針と糸で縫い合わせますよ？もちろん麻酔なしで」

ほら、空巻先生のありがたい御忠告だ。

その瞬間にクラスはシンと静かになった。

「つまんないですね・・・普通に静かになるなんて・・・」

待ってくれ空巻先生。つまんないって何がつまんないだ。もし静かにならなかったらあなたは一体何をするつもりだったんだ。もう怖い方面にしか思考が働かねえよ。

「とりあえず、代表リレーのこのクラス男子代表は方城君でいいですね」

『はーい』

満場一致。クラスメイトの仲が良いのは素晴らしいことだ。
だが誰か一人くらい俺の意見を尊重してくれる優しい奴はいないのか。

「先生、一応聞きますが、俺の意見は？」

「知りません」

そうだよな。俺を囃し立てるくせに俺の意見は皆無視だもんな。分かってたよ。

「では女子代表は誰にしますか？」

それもスポーツテストの結果で決めればいいんじゃないでしょうか。

「はい」

手を挙げたのは・・・杏奈！？

あいつ運動できるんだっけ。杏奈が運動してるところ見たことねえけど、まあ自信があるから挙手したんだよな。

「（あ・・・杏奈ちゃん・・・！これを機に時雨との距離を縮める気だ・・・！私だってそこそこできるのに・・・出遅れた・・・。杏奈ちゃんずるい・・・！）」

「（悪いわね出雲。私が一歩リードさせてもらうわ！ふふ・・・運動得意でもあんまり嬉しくなかったけど・・・今は私に運動の才をくれた神様に感謝するわ・・・！！）」

なにやら出雲と杏奈が目で会話してる感じがするな。仲良くなったもんだ。うん、良いことだ。

「それでは女子の代表は標部さんでよろしいですか？」

『はーい（・・・）』

今度も満場一致・・・いや、出雲が返事してねえな。なんか暗いような、歯がゆいような、悔しそうな・・・とにかく複雑な表情だ。

それに対して杏奈は嬉しそうな、万感の思いって感じのような、勝ち誇ってるような・・・出雲と真逆な明るい表情だな。
もしやさっきの目で会話らしきものをした時に何かあったのか・・・？
まあどうでもいいけど。

「それでは他の競技の選手も決めたいと思います」
そこから先の話は流して聞いた。代表リレーの選手は他の競技に出場できないからな。
ちなみに出雲は最後まで手を挙げることはなかった。別に運動は苦手じゃなかったはずだがな。

「時雨！リレー頑張るわよ！」
授業が終わると杏奈がすぐに俺の席に来て嬉しそうに話しかけてきた。
「おお、そうだな」
何故嬉しそうにしてるのか。そんなにリレーの選手やりたかったのだろうか。まあやる気を出してくれてるんならいいけどよ。
それで・・・
「何故お前は俺に抱きついてる出雲？」

いつの間にやら出雲が俺に抱きついてきた。理由は皆目見当つかねえ。

「ちょっ・・・なにやってんのよ!!」

「だって・・・なんか抱きつきたいんだもん・・・」

抱きつきたいから抱きつく。なんて分かりやすい理由だ。

「あ・・・あたしにも抱きつかせなさいよ・・・!」

そういうと杏奈まで抱きついてきた。なんだこの状況。軽く恥ずかしいし、周りからニヤニヤした目で見られてるし、二人のアレが・・・当たってるし・・・。

女子に抱きつかれるってのは結構幸せなことだとは思うんだが、今の俺にはそんな気持ちはない。

「うー・・・」

「んにぃ〜・・・」

なぜならこの二人が睨み合ってるから。俺の左右に抱きつきながら睨み合ってる。しかも唸り声まであげて。空気が重い。理由も全くわからない。この状況で幸せな気持ちになんかなるか。

「二人とも離れろ」

『いや!』

「いや」じゃねえよ。俺の都合も考えろよ。

結局休み時間が終わるまで俺は抱きつかれたままだった。

こういうのを「両手に花」って言うのか？

いや・・・絶対違うな。

ｅｐ１４　体育祭の選手決めと何かがちがう両手に花（後書き）

後書きです。

〈時雨〉「時雨だ。今回のことは俺達からも謝りたい。無責任な駄作者のせいでご迷惑をおかけした」

ホントすいません・・・

それと今回はトークタイムも人物紹介もなしで。

〈時雨〉「次回からは普通にやっていくから、これからもよろしく頼む」

では、次回予告です。

〈次回予告〉

体育祭の練習のあと、俺は悲劇にみまわれた。

ラッキー？違う！アンラッキーだ！

次回　アンラッキースケベと闇病みモード

出雲がついに・・・おかしくなった・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9012x/

方城時雨の奇妙でイカれた学園生活

2012年1月6日23時50分発行